
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第62集

皿沼西 / 堀南

— 深谷市内遺跡 XI —

2000.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第62集

皿沼西 / 堀南

— 深谷市内遺跡 XI —

2000.3

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「皿沼西／堀南」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

今回の発掘調査は、共に個人専用住宅建設工事に先立ち実施いたしましたもので、皿沼西遺跡からは住居跡4軒、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡2棟、土壇11基、溝3条、堀南遺跡からは住居跡2軒などが姿を現しました。出土した遺構、遺物の年代は、古墳時代前期～平安時代と幅広いものでした。この頃は、肥沃な妻沼低地の開発が進み、深谷市の遺跡が急速に増加する時代であります。正に、現代の深谷市農業の基礎が築かれた時代であり、当時の生活を探求することは、深谷市の歴史を語る上で欠かすことができません。

その一方で、近年深谷市も他市町村の例に漏れず、様々な開発が盛んに行われ、遺跡が破壊される危険に直面しております。このような状況の中、失われつつある埋蔵文化財を保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題となっております。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆さんにご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて文化財保護精神の高揚に役立てば、望外の喜びであります。

最後に、今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました森広高氏、望月勢津子氏をはじめ、関係者の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げまして序にかえさせていただきます。

平成12年3月

深谷市教育委員会

教育長 中村克彦

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字戸森字新田 834 - 1 に所在する皿沼西遺跡、及び深谷市大字伊勢方字堀南 333 - 4、- 5 に所在する堀南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共に個人専用住宅の建築に伴う事前調査であり、平成 10 年度市内遺跡発掘調査として行われた。
3. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となって実施し、調査費用については、国庫及び県費の補助金を受けた。
4. 発掘調査期間は、次の通りである。
皿沼西遺跡 …… 平成 10 年 8 月 19 日～平成 10 年 9 月 18 日
堀南遺跡 …… 平成 11 年 1 月 5 日～平成 11 年 1 月 14 日
5. 発掘調査および出土遺物の整理は次の者が担当した。
皿沼西遺跡 …… 知久 裕昭
堀南遺跡 …… 青木 克尚
6. 各遺跡についての記述は、それぞれの担当者が執筆した。ただし、Ⅱ章、Ⅴ章- 2、- 3 については青木が、Ⅴ章- 1 については知久が執筆した。
7. 本書に掲載した挿図類の縮尺は、原則としては次の通りである。
遺構 住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土壙 1 / 60、溝 1 / 80
遺物 1 / 4 (堀南遺跡の縄文土器、石器は 1 / 3)
8. 遺物の実測図は、還元焰焼成の須恵器の断面を、黒塗りで表現した。
9. 遺物観察表の記載は以下の通りである。
 - ・計測値の単位は cm で、() を付したものは推定値を示す。
 - ・種別は土師器を H、還元焰焼成の須恵器を S、酸化焰焼成の須恵器を H S と表記した。
 - ・胎土は、肉眼で観察できた範囲での含有物を以下のアルファベットで表した。
A…白色粒子、B…黒色粒子、C…赤色粒子、D…石英、E…砂礫、F…白色針状物質
10. 遺構実測図中の水系レベルは、特に記さないものは、次のように統一した。
皿沼西遺跡 …… 標高 34.400 m
堀南遺跡 …… 標高 38.300 m
11. 遺物の注記、および原図における遺構の略号は次の通りである。
住居跡… S J、竪穴状遺構… S X、掘立柱建物跡… S B、溝… S D、土壙… S K
12. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
磯崎 一 澤出 晃越 中村 倉司 (敬称略)

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	加藤 和説 (平成10年度)
			中村 克彦 (平成11年度)
		教育次長	逸見 稔
事務局	深谷市教育委員会社会教育課	課長	根松 文良
		課長補佐	金井 秀夫
		文化財保護係長	石川 博
		主任	古池 晋禄
		主事	富田 和利
		調査担当者	主事 青木 克尚 (堀南遺跡)
			主事 知久 裕昭 (皿沼西遺跡)

調査参加者

阿部ルリ子	池田 敦子	江原 木子	大沢日出子	大澤 大美	大原 黎子
河合 詔子	木村 洋子	久米 紀子	倉上多美子	小沼 和子	里山まり子
島津 芳子	砂田伊久子	高田 秀子	滝沢はつえ	田中 美樹	知久 祥子
都築百合子	鳥山 瀧子	中沢 モト	檜橋 道子	根岸 邦子	根本 智子
浜野 光子	藤浦 春枝	藤野ウメ子	前田 悠子	本橋 玲子	森 光代
諸岡美樹子	吉野真由美				

目 次

序		c 掘立柱建物跡	13
例言		d 溝	16
I 発掘調査の経過	1	e 土壌	16
1 発掘調査に至る経過	1	f ピット群	18
2 発掘調査の経過	1	g グリッド出土遺物	18
II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2	IV 堀南遺跡	21
III 皿沼西遺跡	4	1 遺跡の概要	21
1 遺跡の概要	4	2 遺構と遺物	21
2 遺構と遺物	6	a 住居跡	21
a 住居跡	6	V 結語	25
b 竪穴状遺構	11	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 皿沼西、堀南遺跡及び周辺の遺跡分布図	3	第14図 第1号掘立柱建物跡実測図	13
第2図 皿沼西遺跡の位置と発掘調査区	4	第15図 第2号掘立柱建物跡実測図	14
第3図 皿沼西遺跡全体測量図	5	第16図 掘立柱建物跡出土遺物	14
第4図 第1号住居跡実測図	6	第17図 溝実測図	15
第5図 第1号住居跡出土遺物	7	第18図 溝出土遺物	16
第6図 第2号住居跡実測図	8	第19図 土壌実測図	17
第7図 第2号住居跡出土遺物	8	第20図 土壌出土遺物	17
第8図 第3号住居跡実測図	9	第21図 ピット群実測図	19
第9図 第3号住居跡出土遺物	9	第22図 グリッド出土遺物	20
第10図 第4号住居跡実測図	10	第23図 堀南遺跡の位置と発掘調査区	21
第11図 第4号住居跡出土遺物	11	第24図 堀南遺跡遺構実測図	22
第12図 竪穴状遺構実測図	12	第25図 第1号住居跡出土遺物	23
第13図 第1号竪穴状遺構出土遺物	12	第26図 第2号住居跡及びグリッド出土遺物	24

表 目 次

皿沼西遺跡	第8表 溝出土遺物観察表	16
第1表 周辺遺跡一覧表	第9表 土壙出土遺物観察表	17
第2表 第1号住居跡出土遺物観察表	第10表 グリッド出土遺物観察表	20
第3表 第2号住居跡出土遺物観察表	第11表 皿沼西遺跡遺構新旧対照表	20
第4表 第3号住居跡出土遺物観察表	堀南遺跡	
第5表 第4号住居跡出土遺物観察表	第12表 第1号住居跡出土遺物観察表	23
第6表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表	第13表 第2号住居跡出土遺物観察表	23
第7表 掘立柱建物跡出土遺物観察表	第14表 グリッド出土遺物観察表	23

図 版 目 次

皿沼西遺跡

図版1	調査区全景 調査区北半 第1号住居跡 第1号住居跡貯蔵穴 第2号住居跡 第2号住居跡カマド 第3号住居跡 第3号住居跡カマド
図版2	第4号住居跡、第3号溝 第4号住居跡遺物出土状況 第1号竪穴状遺構遺物出土状況 第1号掘立柱建物跡 第1号住居跡3 第1号住居跡4 第1号住居跡5 第1号住居跡9
図版3	第2号住居跡3 第3号住居跡1 第3号住居跡3 第3号住居跡5 第3号住居跡6 第3号住居跡7 第3号住居跡9 第3号住居跡10
図版4	第4号住居跡1 第4号住居跡3(1) 第4号住居跡3(2) 第4号住居跡4 第4号住居跡5 第4号住居跡6 第1号竪穴状遺構1 第1号竪穴状遺構4

堀南遺跡

図版5	調査区全景 第1号住居跡遺物出土状況 第2号住居跡カマド 第2号住居跡カマド土層断面 第2号住居跡カマド遺物出土状況 第2号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡2 第1号住居跡4
図版6	第1号住居跡5 第2号住居跡3 第2号住居跡4 第2号住居跡5 第2号住居跡6 第2号住居跡7 第2号住居跡10 縄文土器、石器

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

皿沼西遺跡

皿沼西遺跡はJR深谷駅より北へ2.3km、福川と唐沢川が交わる地点に近く、それらの作用で形成された自然堤防上に立地する。標高は約35m、現在は一面に畑地が広がる。当該遺跡はこれまでに調査事例がなく、遺跡の様相はまったく掴めていない状況にあった。そこで市教育委員会は遺跡様相の把握のため、事前の確認調査などを実施してきた。

平成10年1月、大字戸森834-1で個人専用住宅の建築が明らかとなり、市教育委員会では申請者である森広高氏との協議を経て、平成10年7月6日当該地の確認調査を実施した。調査の結果、全域で住居跡等の遺構や土師器等の遺物を検出した。この結果を踏まえ、市教育委員会は森氏と更に協議を重ね、発掘調査の実施を決定、埋蔵文化財発掘調査通知（平成10年7月15日付深教社発第674号）を提出し、準備に入った。

なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成10年8月3日付教文第3-280号で指示通知を受けた。

堀南遺跡

堀南遺跡はJR深谷駅より北西へ2.5km、標高は約38～39m。遺跡は土師器や須恵器の散布が大量に認められていた。そこで市教育委員会は、遺跡の様相を把握するため、事前の確認調査などを実施してきた。

平成10年9月、大字伊勢方333-4、-5で個人専用住宅の建築が明らかとなり、市教育委員会では申請者の望月勢津子氏との協議を経て、平成10年12月18日当該地の確認調査を実施した。その結果、住居跡等の遺構や土師器等の遺物を検出した。これにより、市教育委員会は望月氏と更に協議を重ね、発掘調査の実施を決定、埋蔵文化財発掘調査通知（平成10年12月24日付深教社発第1268号）を提出し、準備に入った。

なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成11年1月13日付教文第3-656号で指示通知を受けた。

2 発掘調査の経過

皿沼西遺跡

平成10年に行われた、皿沼西遺跡発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

8月18日(火) 表土剥ぎ、発掘調査準備、器材搬入。

8月19日(水) 表土剥ぎ、周辺環境整備、遺構確認作業。

8月20日(木)～9月3日(木) 遺構確認作業、遺構調査、基準点測量。

9月4日(金)～9月18日(金) 遺構確認作業、遺構調査、実測、写真撮影、器材搬出。

10月5日(月) 埋め戻し。

例年にない大雨が集中し、調査区が水浸しになることが重なった。しかしそのような状況の中で、多くの遺構、遺物が検出され、大きな成果を得ることができた。これは発掘作業に参加された方の努力によるところが大きい。

堀南遺跡

平成11年に行われた、堀南遺跡発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

1月5日(火) 表土剥ぎ、発掘調査準備、器材搬入。

1月6日(水) 周辺環境整備、遺構確認作業。

1月7日(木) 遺構確認作業、写真撮影、基準点測量。

1月8日(金) 遺構調査。

1月11日(月) 遺構調査。

1月12日(火) 実測、写真撮影、遺構調査。

1月13日(水) 実測、写真撮影。

1月14日(木) 写真撮影、器材搬出。

調査区が岡部町との市町境に位置し、名物の西風が直接肌に突き刺さった。特に風の強い日は、簡易トイレも倒れ、作業に参加された方の手を煩わせた。しかし、小規模な調査にも関わらず、住居跡が2軒検出され、多くの成果が得られた。

II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、市のほぼ中央部を東西に通るJR高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は、荒川によって作られた古い扇状地が侵食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの崖線で比高差5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8mほど延びていて、比高差2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、最近の発掘調査でも埋没谷等が検出され、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。また、末端には所謂先端湧水と認められる池などもある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど見られず、妻沼低地と接する台地末端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

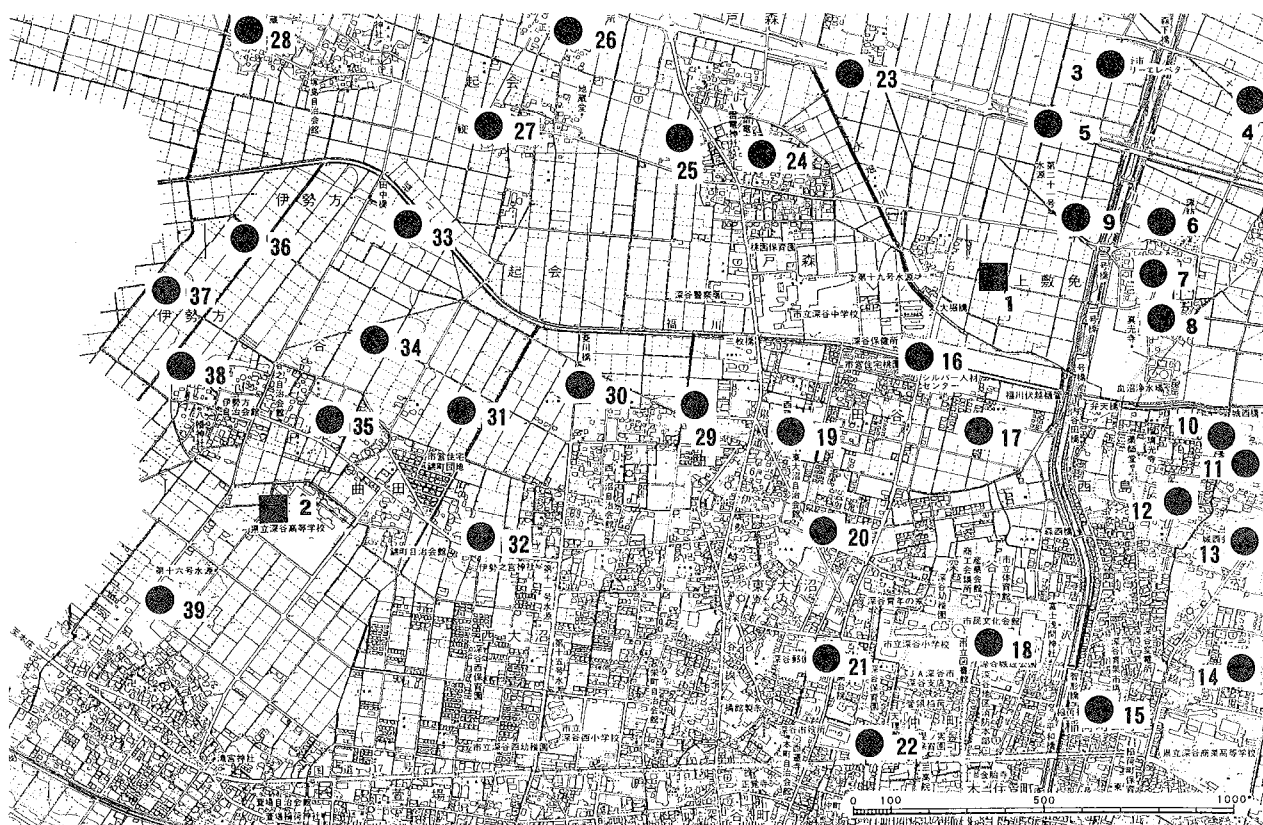
妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵・台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が急増している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。こうした深谷市の地理的環境を踏まえ、皿沼西・堀南遺跡及び周辺遺跡の様相を概観したい。

皿沼西遺跡、堀南遺跡は共に妻沼低地の自然堤防上

に立地し、縄文時代から平安時代の遺物が出土している。堀南遺跡では少量ながら諸磯b式土器が出土し、縄文時代前期から周辺では集落形成の可能性がある。しかし、遺構が見出せるのは古墳時代前・中期からであり、洪水等河川の氾濫により遺構が確認できない。周辺の遺跡では、現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団で整理中の33の堀東遺跡で縄文中・後期の遺物が出土し、昭和50年代には翡翠製の大珠が出土している。21の深谷町遺跡では縄文時代中・後期の流路が確認され、多量の土器と共に漆塗りの木製杓子が出土した。また4の上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり東海系条痕文土器が検出され、埼玉県では初の遠賀川系の壺が見つかった。上敷免遺跡では縄文後・晩期から弥生時代に断絶なく人々の営みが続いていたようである。その他、周辺数遺跡で縄文時代の遺物が出土しているが、明確な遺構は確認されていない。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と若干時期が下る住居跡が同一の自然堤防上に確認され、該期の集落のあり方を考える上で注目される。弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡の分布状況は明確ではないが、古墳時代前期の遺跡は堀南遺跡を始め最近調査例が増えている。中期は遺跡数が減少し、皿沼西遺跡が貴重な調査事例となった。後期になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれ、また11、12、13など台地上に小規模な円墳が数多く造られるようになり、古墳群を形成する。

奈良・平安時代の遺跡は前代と同じ分布状況を示すが、10世紀代以降の遺跡の分布はそれまでとは異なり、遺跡の確認数が減少する。これは選地による生活域の変化の後に、竪穴遺構の減少や後年の土取りなどの影響で遺構が消滅してしまったこと等が考えられる。平安時代末期以降、猪俣党武士団の居館が各地に出現し、室町時代以降は深谷上杉氏の所領となり、7の皿沼城跡、18の深谷城跡、35の曲田城跡が確認されている。



第1図 皿沼西、堀南遺跡及び周辺の遺跡分布図

番号	名称	時代	番号	名称	時代
1	皿沼西遺跡	縄文、弥生、古墳前期～平安	20	No. 156 遺跡	縄文、古墳後期～平安
2	堀南遺跡	縄文、古墳前期～平安	21	深谷町遺跡	縄文中・後期、古墳前期
3	上敷免森下遺跡	弥生中期、古墳後期	22	No. 157 遺跡	古墳後期
4	上敷免遺跡	縄文中期、弥生中～後期、古墳後期～平安	23	戸森松原遺跡	奈良、平安
5	森下遺跡	古墳中期、奈良、平安	24	No. 8 遺跡	古墳後期～平安
6	No. 7 遺跡 (円墳)	古墳後期	25	No. 9 遺跡 (円墳)	古墳後期
7	皿沼城跡	中世	26	起会遺跡	古墳中期～平安
8	No. 180 遺跡	弥生中期、古墳後期～平安	27	No. 10 遺跡 (円墳)	古墳後期
9	No. 142 遺跡	古墳後期～平安	28	矢島南遺跡	古墳後期～平安
10	城西遺跡	奈良、平安	29	No. 155 遺跡	縄文中・後期、古墳後期～平安
11	No. 12 遺跡 (円墳)	古墳後期	30	No. 154 遺跡	古墳後期～平安
12	No. 11 遺跡 (円墳)	古墳後期	31	No. 151 遺跡	古墳後期～平安
13	No. 13 遺跡 (円墳)	古墳後期	32	桜田馬場	中世
14	No. 195 遺跡	古墳後期	33	堀東遺跡	縄文中・後期
15	No. 196 遺跡 (円墳)	古墳後期	34	No. 150 遺跡	縄文後期、古墳後期～平安
16	戸森前遺跡	古墳前期～平安	35	曲田城跡	中世
17	No. 145 遺跡	古墳後期～平安	36	No. 147 遺跡	古墳後期～平安
18	深谷城跡	中世	37	No. 148 遺跡	縄文中期、古墳後期～平安
19	大沼弾正忠屋敷跡	中世	38	No. 149 遺跡	縄文中期、古墳後期～平安
			39	No. 153 遺跡	古墳後期

第1表 周辺遺跡一覧表

Ⅲ 皿沼西遺跡

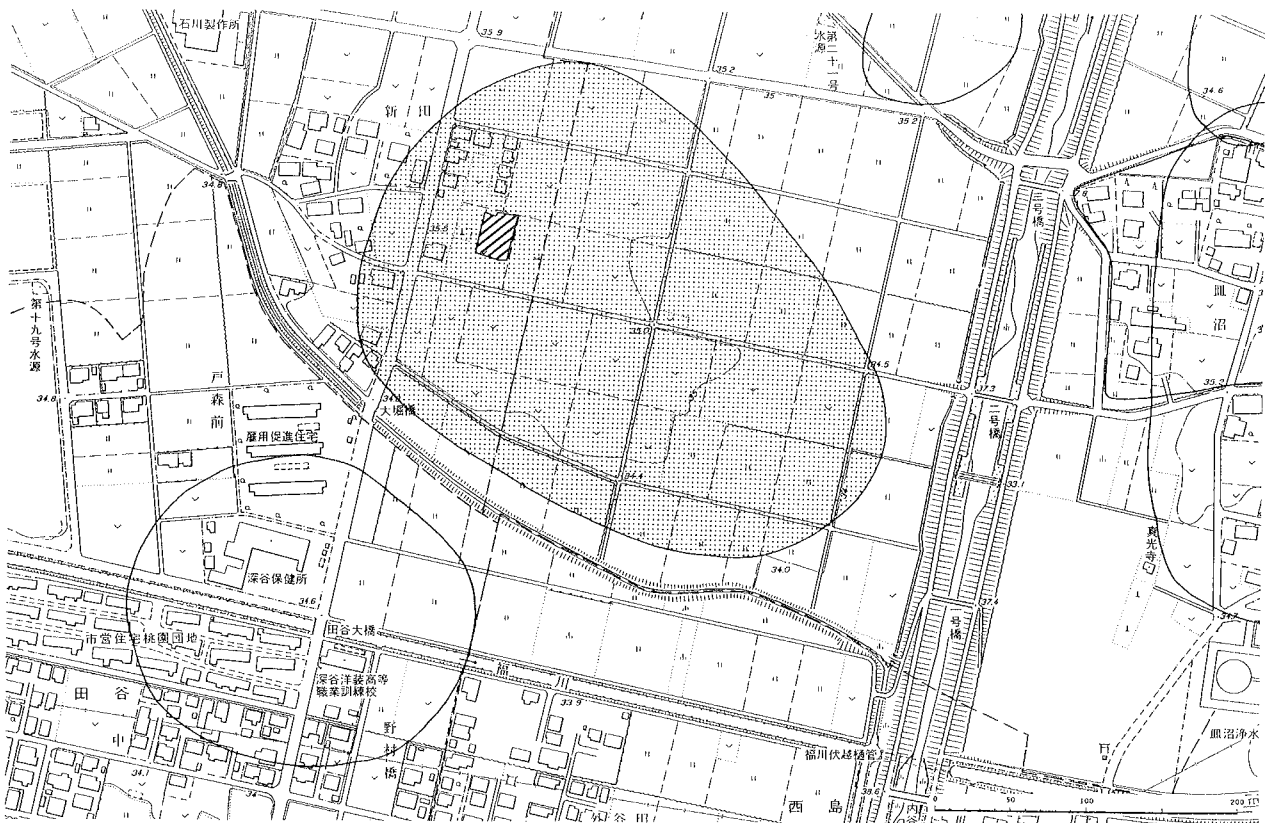
1 遺跡の概要

皿沼遺跡は妻沼低地の南部、深谷市大字上敷免から戸森にかけて所在し、面積は約90000㎡に及ぶと推定される。調査地点の約250m南を福川が流れ、水捌けの悪い場所である。

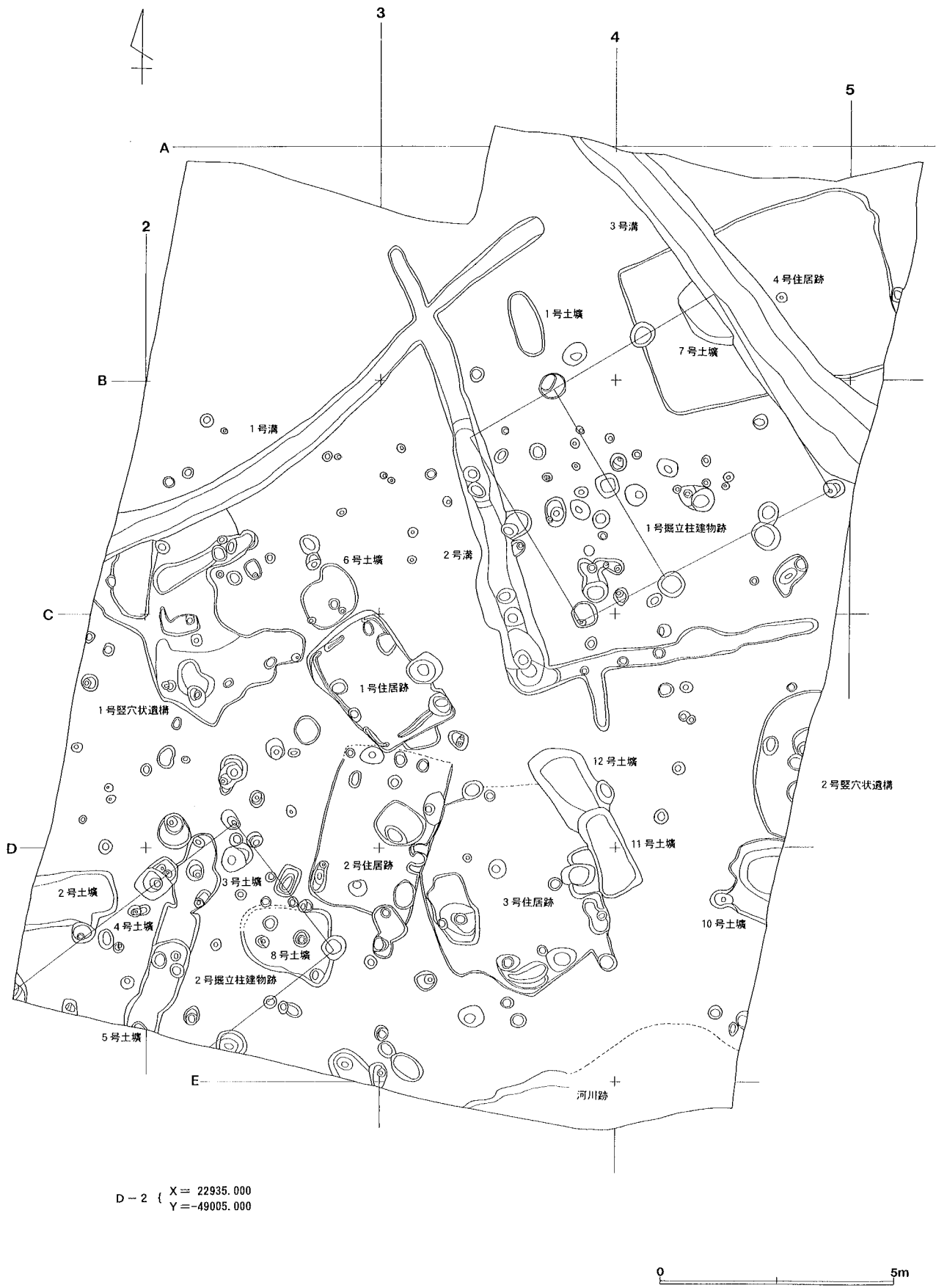
今回の調査で検出された遺構は、古墳時代中期の住居跡1軒（第4号住居跡）、9世紀後葉から10世紀前葉の住居跡3軒（第1～3号住居跡）をはじめとして、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡2棟、溝3条、土塋11基等である。第1号竪穴状遺構は、確証は得られなかったものの、竪穴住居跡の可能性もある。時期は出土遺物から、古墳時代中期と考えられる。遺跡の南西には戸森前遺跡が位置し、調査区から約250mの地点が、福川の河川改修に伴い、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査されている。この地点からは、古墳時代中期を主として、古墳時代前～後期の住居跡が

全部で17軒検出されており、皿沼西遺跡に隣接し併存する集落と考えられる。

一方、皿沼西遺跡の出土遺物は、古墳時代前期～平安時代のものを主とし、堀之内1式土器、弥生土器の小破片がわずかに含まれる。しかし、古墳時代後期～奈良時代の遺物は今回の調査では認められず、平安時代の住居跡はいずれも9世紀後葉から10世紀前葉のものと考えられる。その間、何らかの理由で集落が中断された可能性が考えられる。また、調査区の南端から河川跡と思われる箇所が確認された。そして、調査区の北側約3分の1の範囲では、砂礫層が露出していた。第4号住居跡を始め、北側の各遺構はこの層を掘り込んでおり、古墳時代中期以前の河川跡や洪水による堆積砂礫である可能性が考えられる。



第2図 皿沼西遺跡の位置と発掘調査区



第3図 皿沼西遺跡全体測量図

2 遺構と遺物

a 住居跡

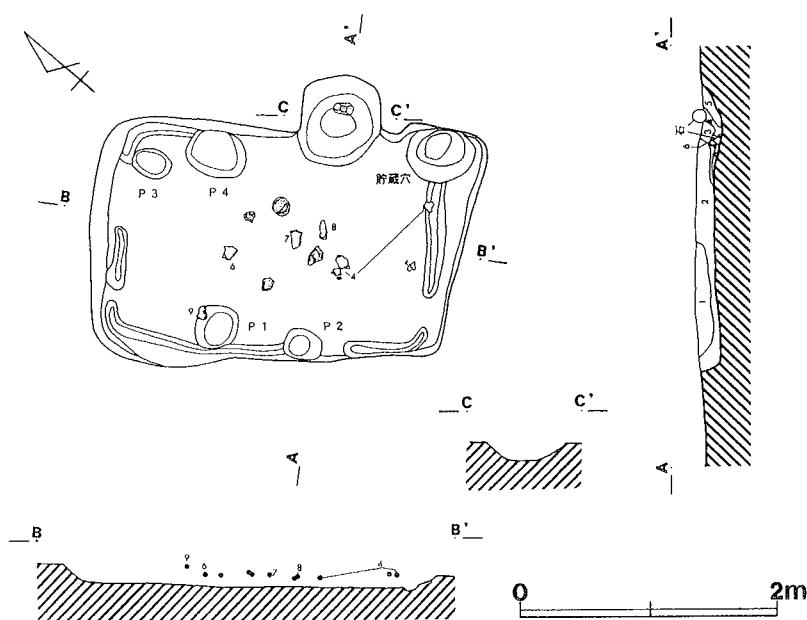
第1号住居跡 (第4～5図、第2表)

C-2・3グリッドに位置し、平面形は横長の長方形を呈する。規模は長軸2.90m、短軸1.80m、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸の傾きはN-52°-Eである。カマドは南東に少し寄り、右袖のみの片袖構造をとる。袖は地山の削り出しである。カマドの袖脇から南東のコーナーが約0.1m突出し、その部分に長径0.52m、短径0.42m、床面からの深さ0.30mを測る貯蔵穴が構築される。壁溝は断続的に検出された。

本住居跡に伴う可能性のあるピットは4基検出された。床面からの深さはP1…6.0cm、P2…21.0cm、P3…4.5cm、P4…7.0cmである。

遺物は、貯蔵穴内から第5図3～5の完形に近い甕が出土した他、住居跡のほぼ中央の覆土上部から須恵器片、土師器片、打製石斧等が出土した。

本住居跡は出土土器から、9世紀後葉の所産と考えられる。



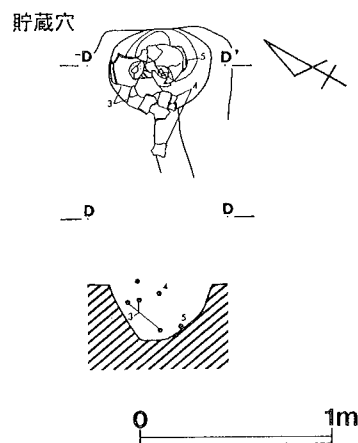
第4図 第1号住居跡実測図

第2号住居跡 (第6～7図、第3表)

C-2・3、D-2・3グリッドに位置し、平面形は横長の長方形を呈する。主軸の傾きはN-104°-Eである。切り合い関係から、第3号住居跡より新しいものと思われる。北側の壁は確認できなかったものの、規模は長軸約1.8m、短軸1.20m、確認面からの深さは0.08mを測る。カマドは東壁の中央からやや南寄りに構築される。袖は被熱により赤色化し、内部まで焼土ブロックを含んでいた。壁溝は検出されなかった。またカマド付近には長径1.10m、短径0.92m、床面からの深さ0.15mの土壌があり、床下土壌の可能性はある。

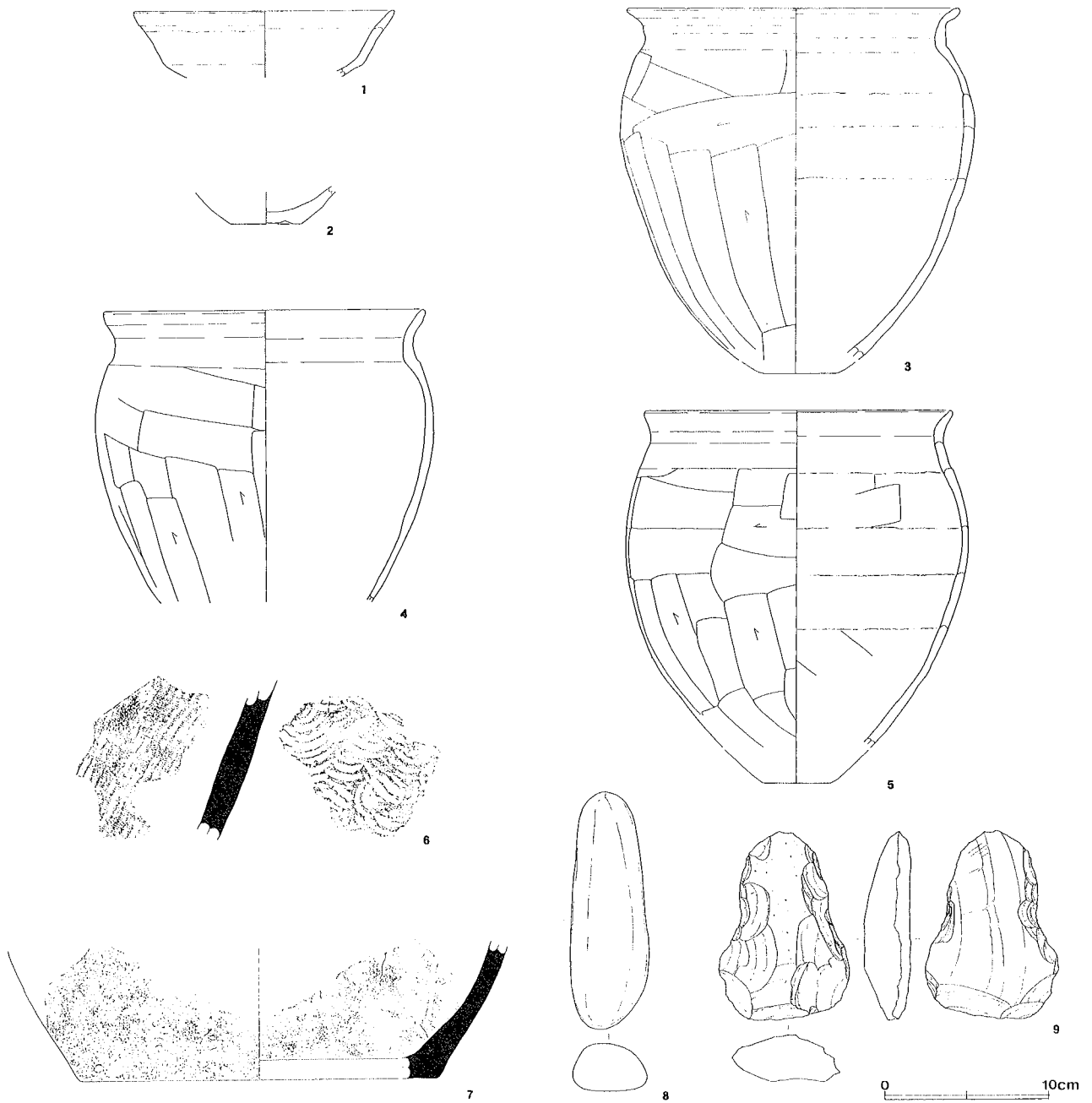
本住居跡に伴う可能性のあるピットは11基検出された。各ピットの床面からの深さは次の通りである。P1…6.5cm、P2…27.0cm、P3…8.0cm、P4…14.5cm、P5…39.5cm、P6…3.5cm、P7…41.0cm、P8…6.0cm、P9…12.0cm、P10…12.0cm、P11…10.5cm。

遺物は、カマド右袖の先端から第7図3の須恵器片が出土している。また、1はP3、2はP7から出土した。本住居跡は第3号住居跡との切り合い関係から、10世紀代の所産と考えられる。



第1号住居跡

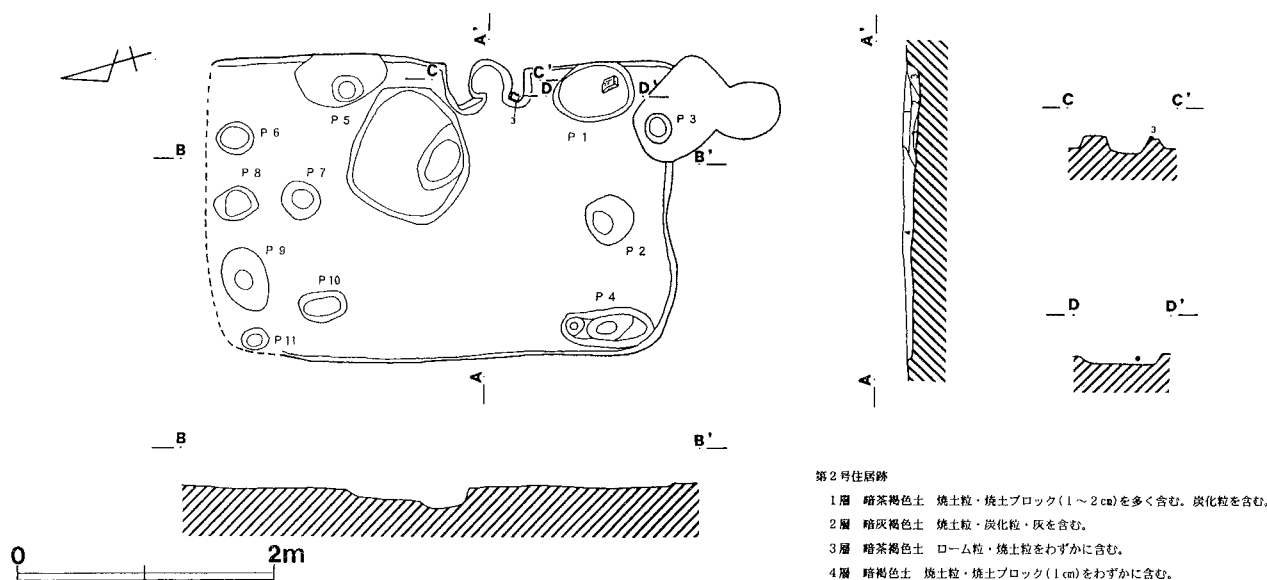
- 1層 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。
- 2層 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。炭化粒を少し含む。
- 3層 淡褐色土 粘土質。焼土粒・焼土ブロックを多く含む。
- 4層 暗灰褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 5層 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 6層 黄褐色土 暗灰褐色土粒・焼土粒を含む。



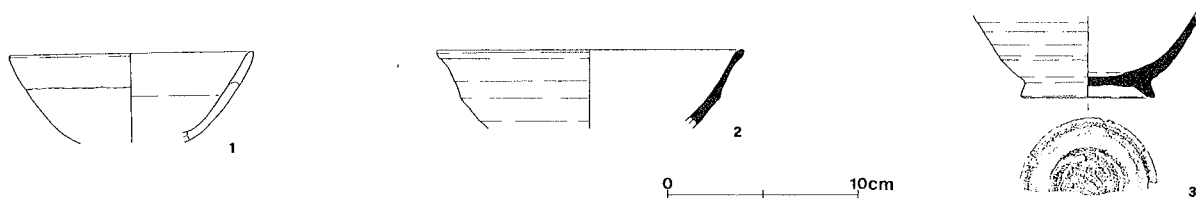
第5図 第1号住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	HS	坏	(16.0)	—	—	A、B、C、D	不良	橙	20%	SJ1 カマド 底面に凹凸が著しい。 SJ1-1, 3, 4, 14, 貯蔵穴, SJ3 (小破片)
2	H	坏	—	—	4.4	B、C、D	普通	黄橙	5%	
3	H	甕	20.6	(22.6)	—	A、B、C	普通	黄橙	85%	
4	H	甕	(19.8)	—	—	B、C、D	普通	橙	40%	
5	H	甕	19.1	23.1	—	A、B、C、D	普通	灰褐	85%	
6	S	甕	—	—	—	A、E	良	灰	—	
7	S	大甕	—	—	(22.0)	E	良	灰	—	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	石材	重量	注記、備考			
8	編物石	14.7	4.8	3.0	砂岩	345 g	SJ1-9			
9	打製石斧	11.7	8.1	2.9	ホルンフェルス	290 g	SJ1-13			

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表



第6図 第2号住居跡実測図



第7図 第2号住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	H	坏	(12.8)	—	—	B、C、D	不良	橙	20%	C 3 P 3
2	S	坏	(16.0)	—	—	C、E	不良	灰	20%	C 3 P 2
3	S	高台坏	—	—	7.0	E	良	灰	30%	S J 2-1

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

第3号住居跡 (第8~9図、第4表)

C-3、D-3グリッドに位置する。長軸4.48m、短軸3.68m、確認面からの深さ0.08mを測り、平面形は不整形を呈する。主軸の傾きはN-85°-Eであり、東西を第2号住居跡、第11・12号土壌に切られる。カマドは西壁のほぼ中央に構築される。袖は地山の削り出しである。カマド前にはP13があり、ピット内には灰や炭化物が多く含まれていた。また、カマド内にあったと思われる灰、炭化物や焼土が南西に向かって流出していた。

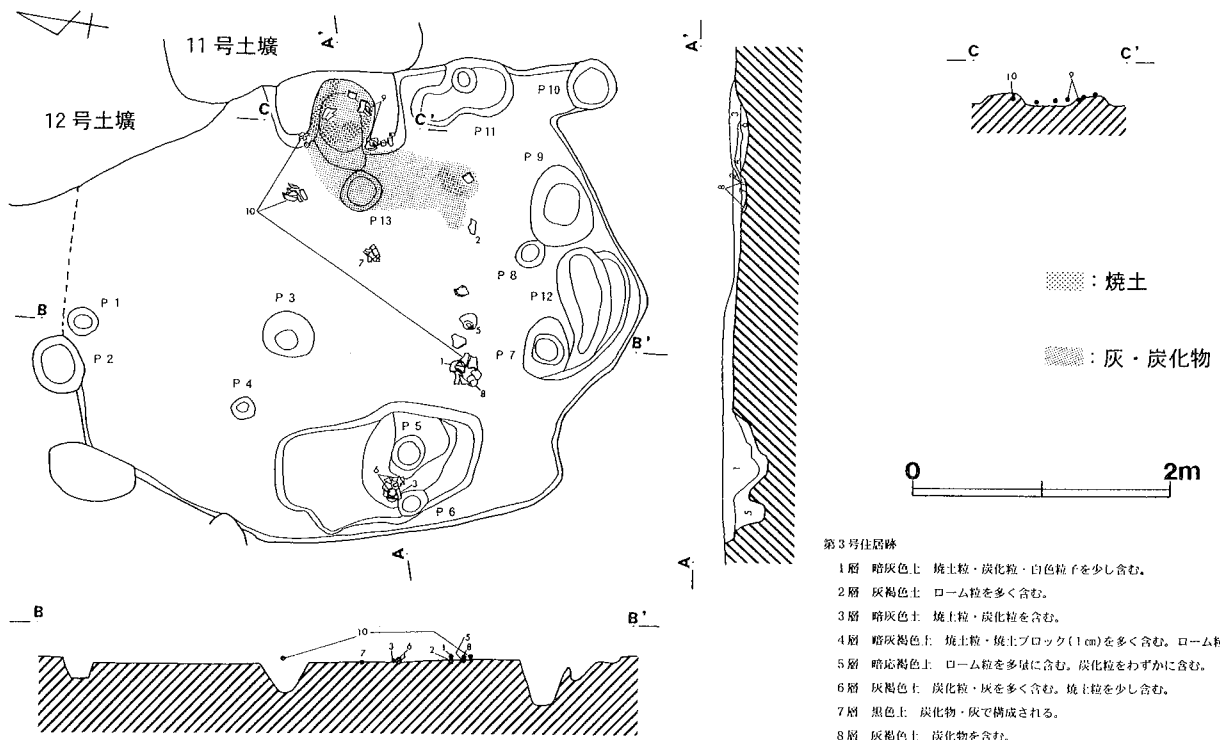
本住居跡に伴う可能性のあるピットは13基検出され

た。各ピットの、床面からの深さは次の通りである。

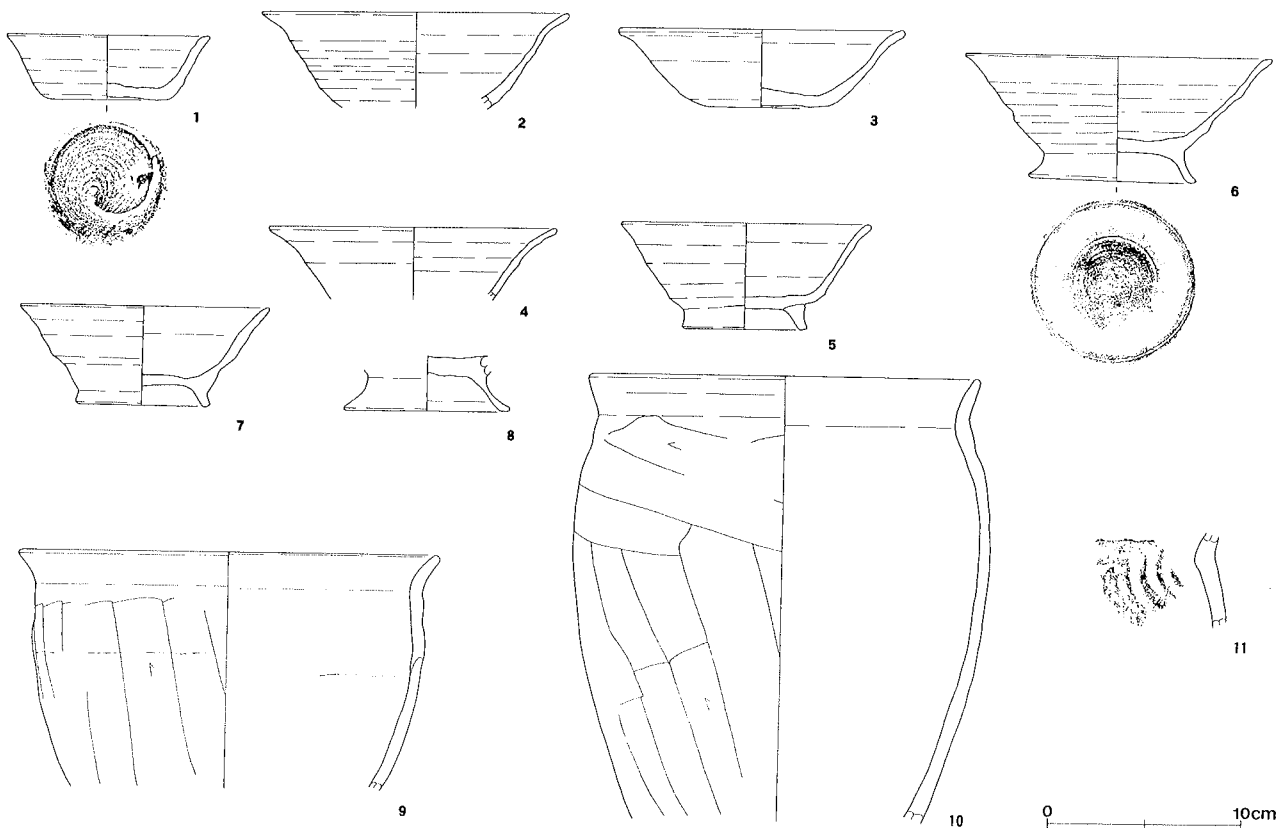
P1…10.5cm、P2…12.0cm、P3…24.0cm、P4…6.5cm、P5…9.5cm、P6…15.0cm、P7…36.5cm、P8…12.0cm、P9…40.5cm、P10…12.5cm、P11…12.0cm、P12…12.5cm、P13…6.0cm。

遺物は、カマド内から第9図9の鉢、及び10の甕が出土した。10は口縁部形態が崩れ、器壁に厚みがある。また床面付近からは、酸化焰焼成須恵器の坏、高台坏が多く検出された。

本住居跡は出土遺物から、9世紀後葉から10世紀前葉の所産と考えられる。



第8図 第3号住居跡実測図



第9図 第3号住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	HS	坏	(10.6)	3.4	6.0	A、B、C、D	普通	橙	70%	SJ3-5
2	HS	坏	(16.0)	—	—	B、C、D、E	普通	橙	30%	SJ3-10
3	HS	坏	14.8	4.1	5.9	A、B、C、E	普通	橙	85%	SJ3-3
4	HS	坏	(15.0)	—	—	A、B、E	普通	黄橙	20%	SJ3カマド
5	HS	高台坏	13.0	5.6	6.4	A、B、C	普通	橙	95%	SJ3-8
6	HS	高台坏	16.6	6.6	8.8	A、B、C	良	にぶい橙	95%	SJ3-1、2、SJ1(小破片)
7	HS	高台坏	13.0	5.2	7.0	B、C、D	普通	橙	70%	SJ3-12
8	HS	高台坏	—	—	(8.7)	A、B、C、D、E	普通	橙	30%	SJ3-6
9	H	鉢	(22.0)	—	—	A、B、C、D、E	良	橙	20%	SJ3-17、18
10	H	甗	20.3	—	—	A、B、C	普通	橙	35%	SJ3-4、13、14、SJ1(小破片)
11	縄文土器	甗	—	—	—	A、B、E	不良	茶褐	—	堀之内1式の新しい段階と思われる。

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

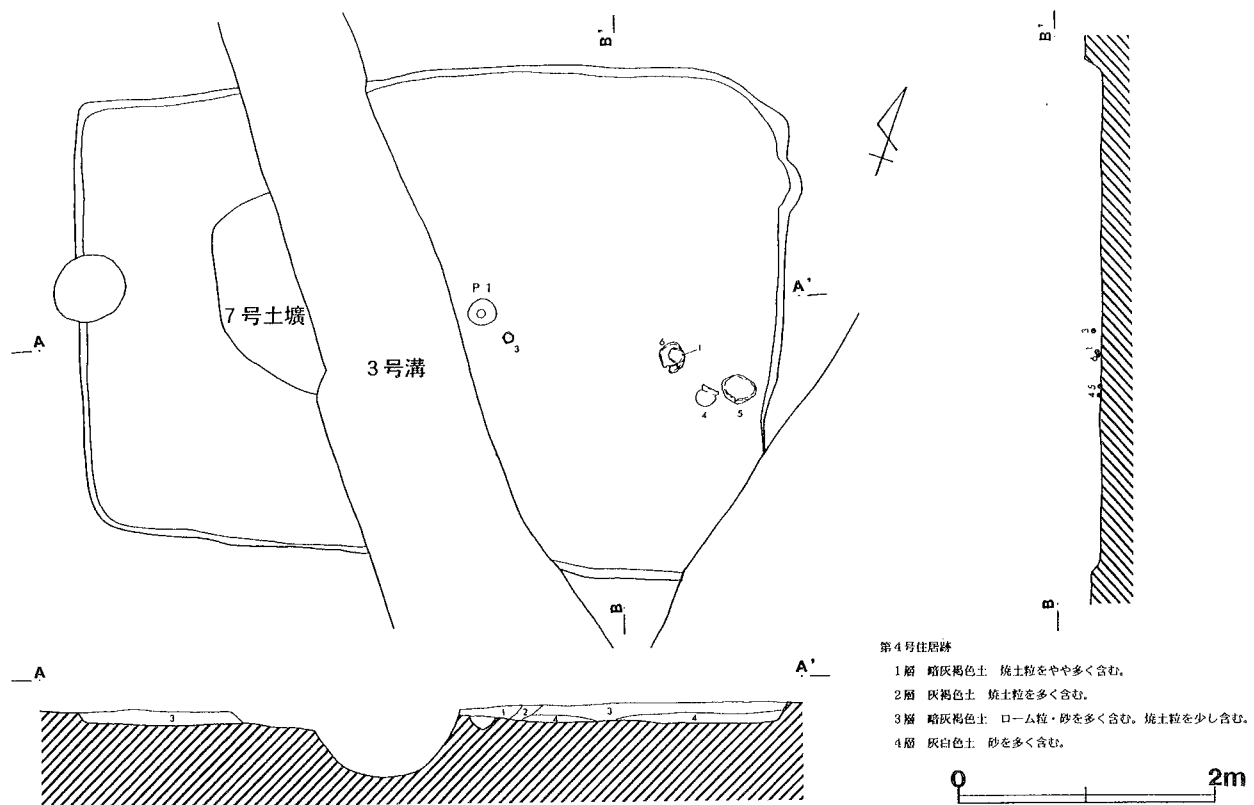
第4号住居跡(第10～11図、第5表)

A-4・5、B-4グリッドに位置し、砂礫層を掘り込んで構築される。平面形は長方形を呈するが、東に向かって少し広がる。規模は長軸5.48m、短軸が東側4.04m、西側3.60m、確認面からの深さ0.16mを測る。主軸の傾きはN-69°-Eである。中央を第3号溝によって分断され、また第1号掘立柱建物跡、第7号土壌に切られる。炉跡、カマド等は第3号溝に破壊

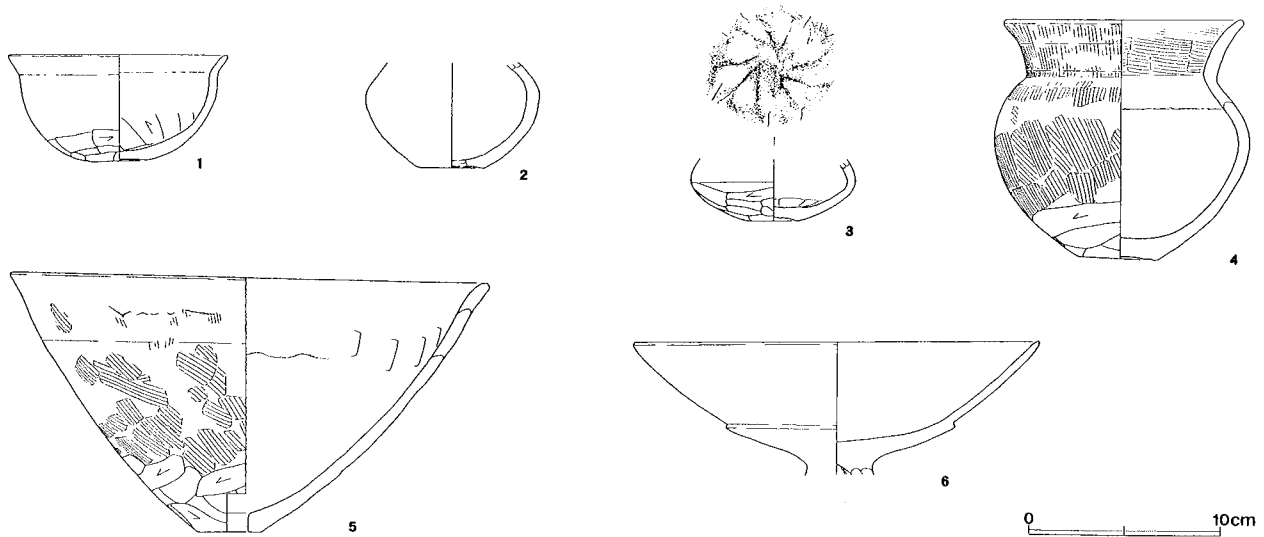
されたためか、検出されなかった。本住居跡に伴うと思われるピットは1基検出された。P1の深さは床面から9.5cmである。

遺物は、第11図1、4～6が、東壁付近の床面近くに集中して出土した。1の碗は、6の高坏に乗る状態で検出された。

本住居跡は出土遺物から、古墳時代中期の所産と考えられる。



第10図 第4号住居跡実測図



第11図 第4号住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	H	碗	11.5	3.0	5.6	A、B、C、D	普通	にぶい赤褐	100%	SJ4-1
2	H	埴	—	—	(3.3)	A、B、D	普通	赤褐	20%	
3	H	碗	—	—	2.5	A、B	良	黄橙	50%	SJ4-5 内面に指頭圧痕がある。
4	H	埴	12.6	12.6	4.1	A、B、D	良	赤褐	100%	SJ4-3
5	H	甔	25.0	13.8	3.3	A、B、D、E	普通	赤褐	98%	SJ4-4
6	H	高坏	21.2	—	—	A、C、D	普通	赤褐	70%	

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

b 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第12～13図、第6表)

B-2・3、C-2・3グリッドに位置する。平面形態は整っていない。北側を第1号溝によって切られ、規模は長軸3.92m以上、短軸3.60m、確認面からの深さ0.14mを測る。底面は平坦ではない。北部からは焼土がわずかに分布する箇所が確認された。平面形態が方形に近いことや、焼土がわずかに分布することなどから、遺存状態の悪い住居跡の掘り方と覆土の一部が検出された可能性が考えられる。

遺物は、焼土が分布する位置の覆土上部から、第13図1の小型土器が底部を上にした状態で出土した。また、高坏の脚部や甕・壺の小破片、台石等も出土している。

本遺構に伴う可能性のあるピットは16基検出された。各ピットの床面からの深さは次の通りである。P1…

5.5cm、P2…10.0cm、P3…29.0cm、P4…4.5cm、P5…5.0cm、P6…16.0cm、P7…21.0cm、P8…15.0cm、P9…18.0cm、P10…4.0cm、P11…14.0cm、P12…7.5cm、P13…41.5cm、P14…8.5cm、P15…6.0cm、P16…13.0cm。

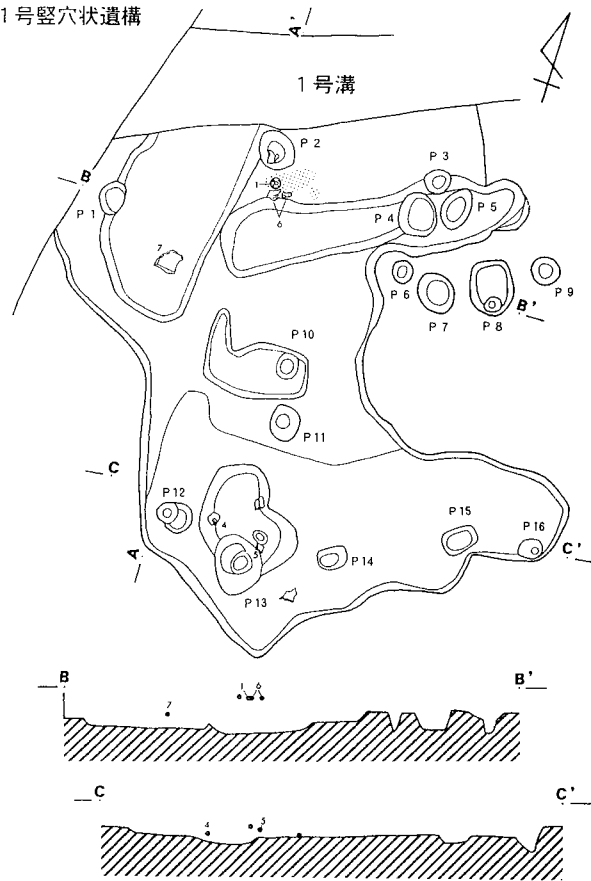
本遺構は出土遺物から、古墳時代中期の所産と考えられる。

第2号竪穴状遺構 (第12図)

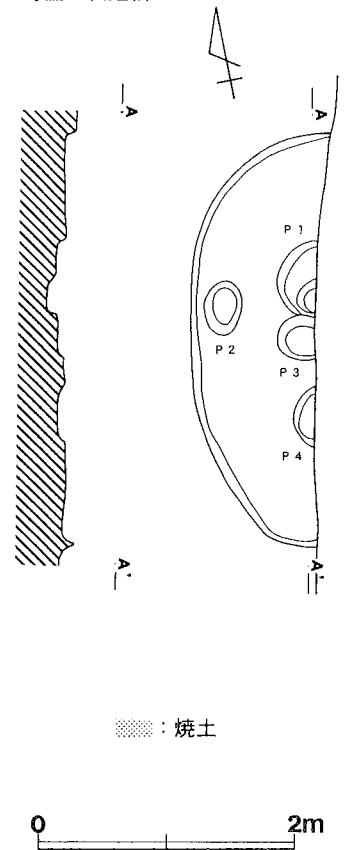
C-4グリッドに位置する。大部分は調査区外にあるが、平面形態は円形を呈すると思われる。規模は径3.24m、確認面からの深さ0.09mを測る。底面はほぼ平坦、覆土はローム粒、焼土粒をわずかに含む暗灰褐色土である。遺物は土師器片が少量出土したのみである。

本遺構に伴う可能性のあるピットは4基検出された。底面からの深さは、P1…15.5cm、P2…1.5cm、P3…6.0cm、P4…4.0cmである。

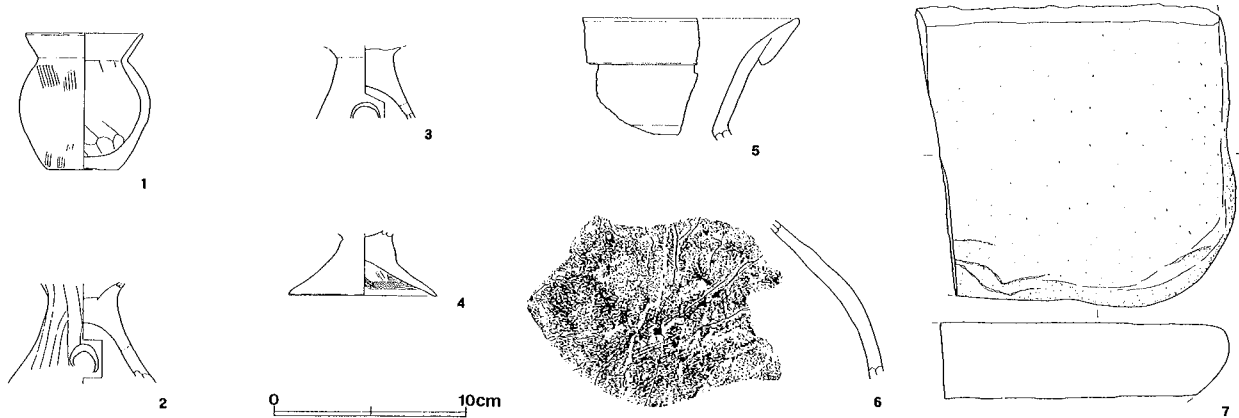
1号竖穴状遺構



2号竖穴状遺構



第12図 竖穴状遺構実測図



第13図 第1号竖穴状遺構出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	H	罎	6.1	7.2	3.7	A、B、E	普通	明橙	95%	SX 1-1
2	H	高坏	—	—	—	B、E	良	明赤褐	40%	
3	H	高坏	—	—	—	A、E	不良	明橙	40%	
4	H	器台	—	—	7.7	A、B、E	普通	赤褐	50%	
5	H	壺	—	—	—	A、B、D、E	良	明橙	—	SX 1-7 一部還元している。
6	H	甕	—	—	—	B、D、E	不良	赤褐	—	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	石材	重量	注記、備考			
7	台石	(16.0)	(15.2)	(4.0)	砂岩	(1900g)	SX 1-9			

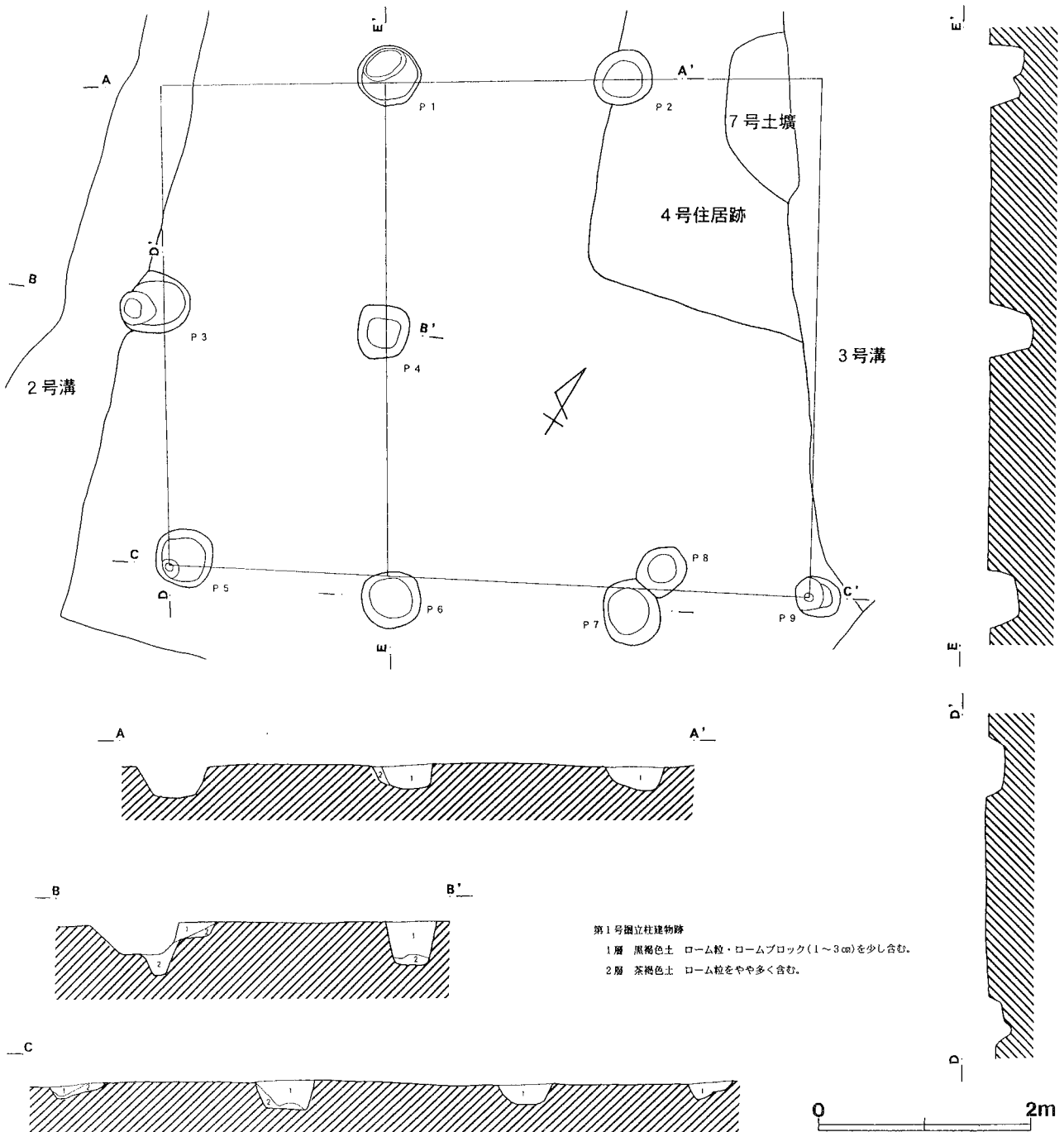
第6表 第1号竖穴状遺構出土遺物観察表

C 掘立柱建物跡

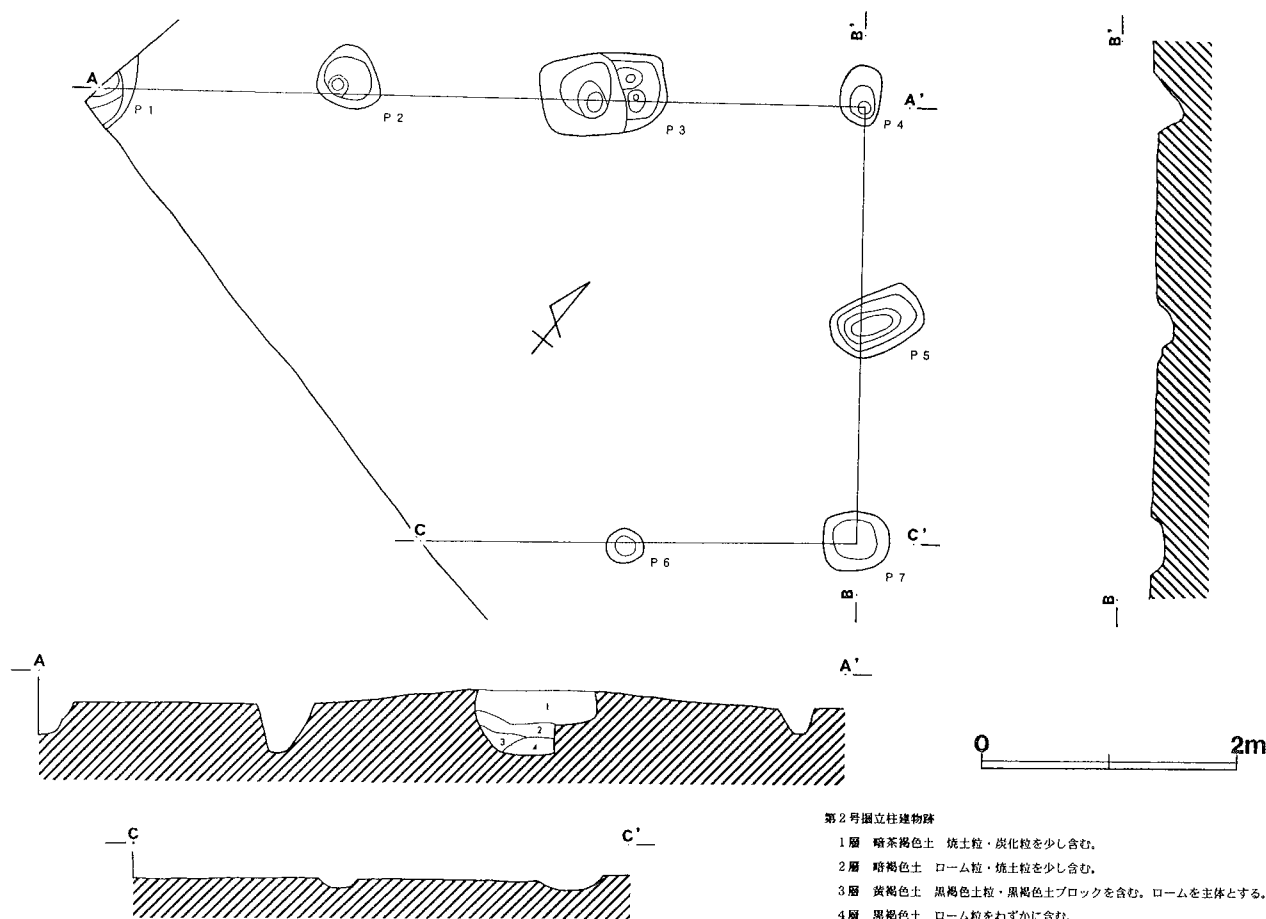
第1号掘立柱建物跡 (第14、16図、第7表)

A-3・4、B-3・4、C-3グリッドに位置する。重複関係から、第4号住居跡より新しく、第2・3号溝より古いと考えられる。桁行2間(4.98m)、梁行2間(3.96m)で、南西に柱間2.04mの庇を設ける。

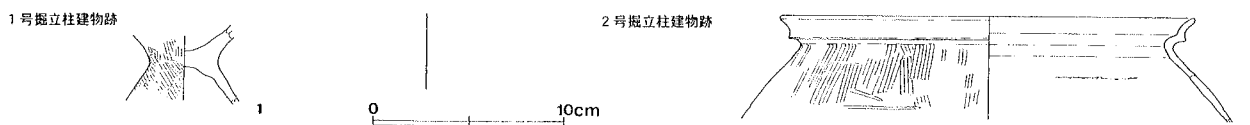
P3-P5の柱間は2.49mであり、建物の軸よりわずかに北西にずれる。桁行の柱間は、北西から2.40m-2.58m、梁行の柱間は北西列が2.22m、南東列が南西から2.28m-1.68mを測る。主軸の傾きは、N-61°-Eである。確認面からのピットの深さは概ね0.2~0.4mであるが、P3は特に深く、0.52mを測る。柱痕等は確認されなかった。



第14図 第1号掘立柱建物跡実測図



第15図 第2号掘立柱建物跡実測図



第16図 掘立柱建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1号掘立柱建物跡1	H	台付甕	—	—	—	A、B、D、E	普通	赤褐	—	SB1P4
2号掘立柱建物跡1	H	台付甕	(21.6)	—	—	A、B、E	普通	灰褐	—	D1P1 S字状口縁を有する。

第7表 掘立柱建物跡出土遺物観察表

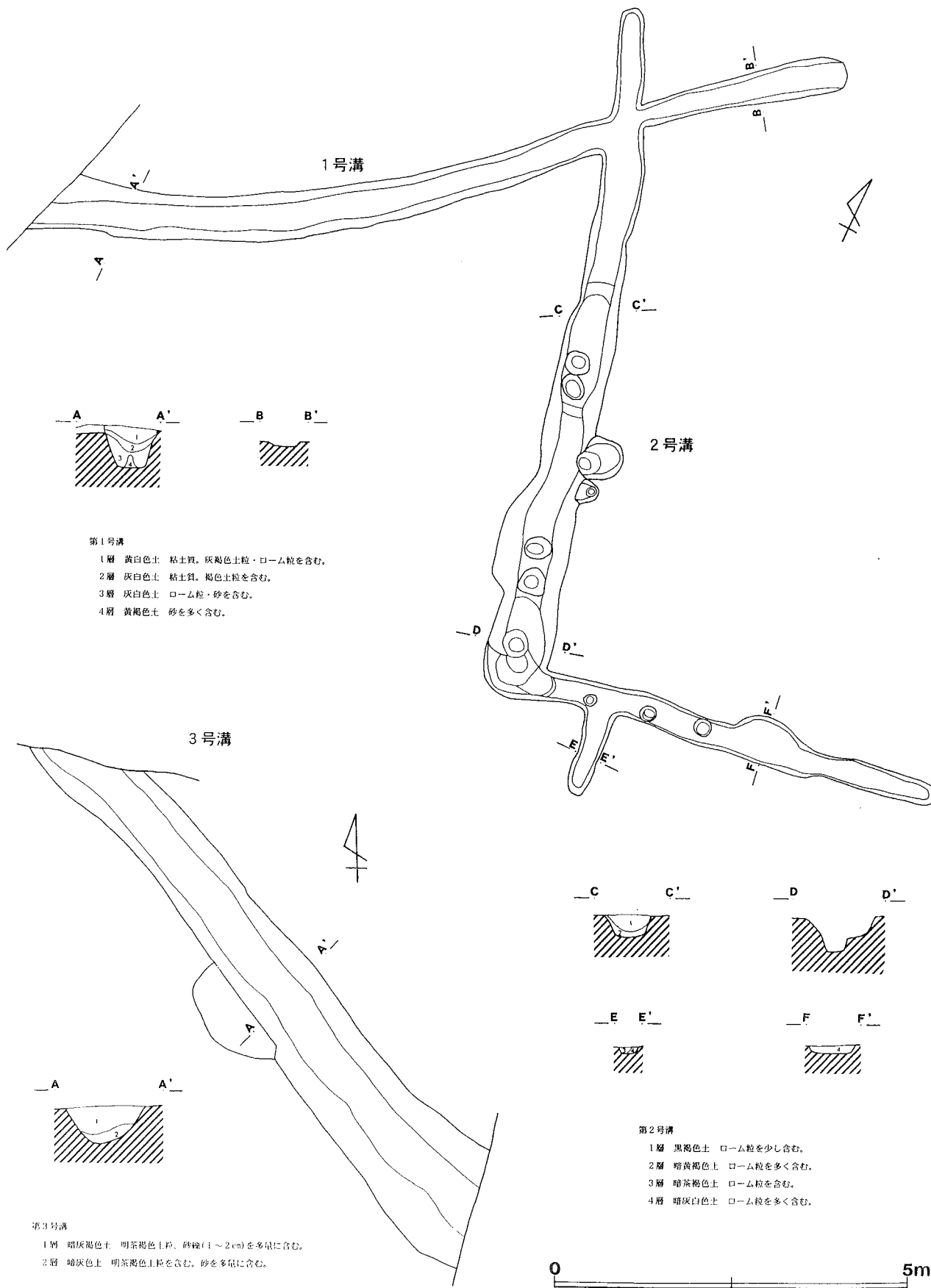
遺物は、刷毛目調整の台付甕の底部小破片がP1から出土したが、本遺構の時期を特定することはできなかった。

第2号掘立柱建物跡（第15～16図、第7表）

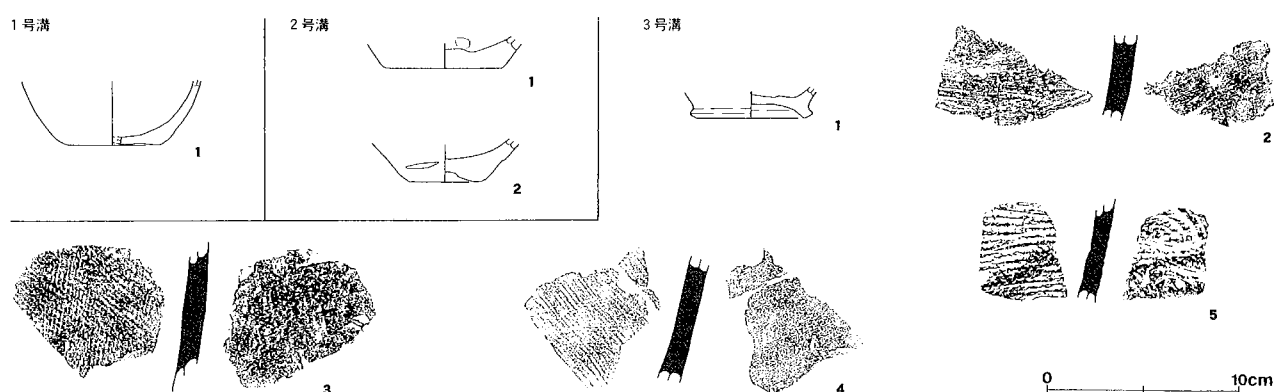
C-2、D-1・2グリッドに位置する。桁行3間(5.97m)、梁行2間(3.48m)を測る。桁行の柱間は、北西列が南西から1.92m-1.92m-1.92m、南東列が1.80m、梁行の柱間が北西から1.77m-1.71mを測る。

主軸の傾きは、N-55°-Eである。確認面からのピットの深さは、北西列が0.2m以上、P2、P3は約0.5mなのに対し、その他のピットは0.1m前後と浅い。いずれも柱痕等は確認されなかった。

遺物は、S字状口縁部をもつ台付甕の破片がP3から出土したが、本遺構の時期を特定することはできなかった。



第17図 溝実測図



第18図 溝出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1号溝1	H	椀	—	—	5.0	B、E	普通	灰褐	40%	内面に指頭圧痕がある。 外面に削痕がある。
2号溝1	H	甕	—	—	(6.0)	C、E	不良	橙	—	
2	H	甕	—	—	3.8	A、B、D	普通	赤褐	—	
3号溝1	HS	高台杯	—	—	(6.4)	A、B	普通	灰褐	15%	
2	S	甕	—	—	—	A	良	灰	—	
3	S	甕	—	—	—	A	良	灰	—	
4	S	甕	—	—	—	A、F	良	灰	—	
5	S	甕	—	—	—	A	良	灰	—	

第8表 溝出土遺物観察表

d 溝

第1号溝 (第17～18図、第8表)

A-2・3、B-1・2グリッドに位置し、第1号堅穴状遺構を切る。北東方向に走り、A-3グリッドで第2号溝と交差し、徐々に浅くなって消滅する。幅は0.70 m、確認面からの深さは最深部で0.59 mを測る。底面はほぼ平坦である。

遺物は土師器が少量出土した。

第2号溝 (第17～18図、第8表)

A-3、B-3、C-3・4グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡を切る。幅は最も広い箇所0.98 mを測る。主な流れは北西方向に走り、C-3グリッドで東に直角に曲がる。また東に屈曲した付近で、更に南に垂直に分岐するが、1.22 mで消滅する。深さは中央付近が最も深く、確認面から0.35 mを測る。両端に向かっては急激に浅くなり、いずれも調査区内で消滅する。第1号溝との切り合い関係は不明であるが、両

者は性格を同じくするものと思われる。

遺物は土師器が少量出土した。

第3号溝 (第17～18図、第8表)

A-3・4、B-4・5グリッドに位置する。第4号住居跡を分断して、北西方向に走る。幅は1.24 m、確認面からの深さは0.54 mを測る。断面形は椀状を呈する。

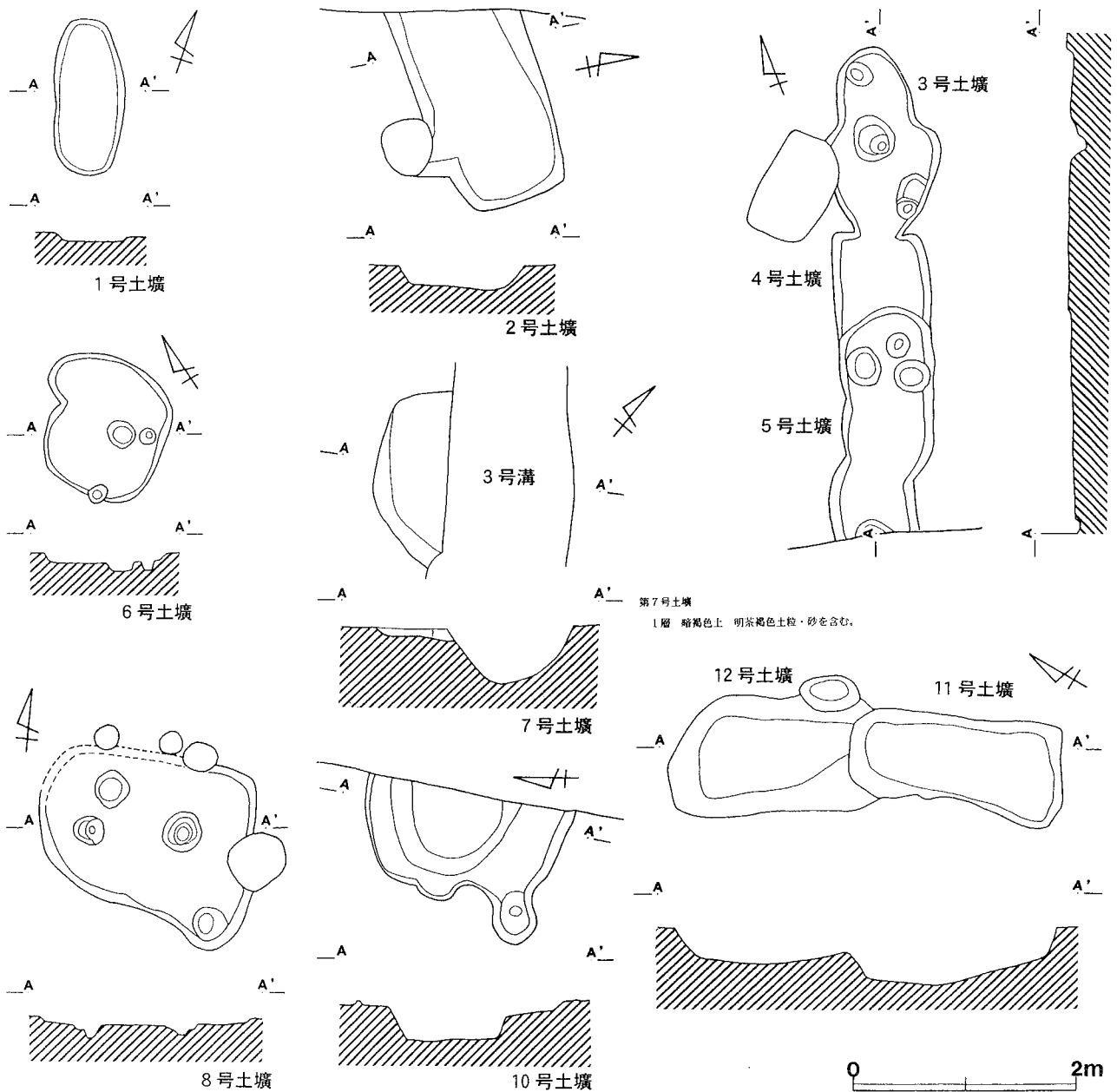
遺物は、須恵器破片が比較的多く出土している。

e 土 壙

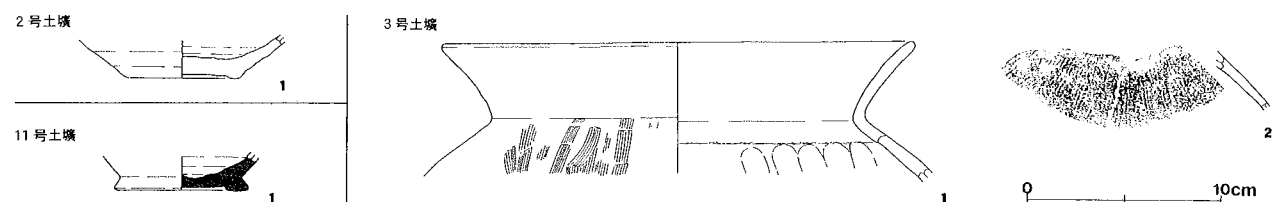
土壙は11基検出された。なお第9号土壙は、整理作業の段階で第2号堅穴状遺構に変更したため、欠番とした。

第1号土壙 (第19図)

A-3グリッドに位置する。長径1.42 m、短径0.60 m、確認面からの深さ0.08 mを測り、楕円形を呈する。底面はほぼ平坦である。主軸の傾きはN-18°-Wである。



第19図 土壙実測図



第20図 土壙出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
2号土壙 1	HS	坏	—	—	5.8	A、B、D	普通	橙	20%	
3号土壙 1	H	甕	(24.8)	—	—	A、B、C、D	普通	明赤褐	10%	
2	H	甕	—	—	—	A、B、E	普通	橙	—	
11号土壙 1	S	高台坏	—	—	(7.0)	B	良	灰	10%	SD4 内面に、釉が微量に付着する。

第9表 土壙出土遺物観察表

第2号土壙 (第19～20図、第9表)

D-1グリッドに位置する。平面形態は長方形を呈すると思われ、短軸1.14 m、確認面からの深さ0.22 mを測る。底面は北側に向かって緩やかに落ち込む。主軸の傾きはN-80°-Eである。

遺物は、酸化焰焼成の須恵器坏の底部が出土した。

第3号土壙 (第19～20図、第9表)

C-2、D-2グリッドに位置し、第4号土壙を切る。規模は長径1.74 m、短径1.00 m、確認面からの深さ0.09 mを測る。平面形態は不整楕円形を呈する。主軸の傾きはN-16°-Eである。覆土はローム粒、白色粒、FA火山灰をわずかに含む暗褐色土である。

遺物は刷毛目調整の甕が出土している。

第4号土壙 (第19図)

D-2グリッドに位置し、第3号土壙に切られる。また第5号土壙と切り合う。平面形態は長方形を呈すると思われ、短軸0.84 m、確認面からの深さ0.05 mを測る。主軸の傾きはN-16°-Eである。覆土はローム粒、白色粒を多量に含む暗褐色土である。

第5号土壙 (第19図)

D-1・2グリッドに位置し、第4号土壙と切り合う。平面形態は不整長方形を呈し、短軸0.80 m、確認面からの深さ0.11 mを測る。主軸の傾きはN-16°-Eである。覆土はローム粒、白色粒を少し含む暗褐色土である。

第6号土壙 (第19図)

B-2、C-2グリッドに位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径1.44 m、短径1.20 m、確認面からの深さ0.08 mを測る。底面はほぼ平坦である。

第7号土壙 (第19図)

A-4グリッドに位置する。第3号溝に大部分を切られ、平面形態は不明である。確認面からの深さは0.12 mを測る。

第8号土壙 (第19図)

D-2グリッドに位置する。長径1.94 m、短径1.50 m、確認面からの深さ0.04 mを測り、平面形態は不整方形を呈すると思われる。

第10号土壙 (第19図)

C-4、D-4グリッドに位置する。平面形態は径1.84 mの不整円形を呈する。掘り方は、確認面から0.09 mの深さでテラスを有し、中央部が更に0.28 m深くなる。最下面は概ね平坦である。

第11号土壙 (第19～20図、第9表)

C-3・4、D-3・4グリッドに位置し、第3号住居跡のカマド先端部付近と第12号土壙を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.92 m、短軸0.76 mを測る。底面は北西に向かって低くなり、最深部で確認面から0.48 mを測る。主軸の傾きはN-28°-Wである。

遺物は、須恵器高台坏の底部が出土している。

第12号土壙 (第19図)

C-3グリッドに位置し、第3号住居跡の一部を切り、また第11号土壙に切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、短軸1.08 m、確認面からの深さ0.33 mを測る。底面は皿状に、中央が若干低くなる。主軸の傾きはN-28°-Wである。

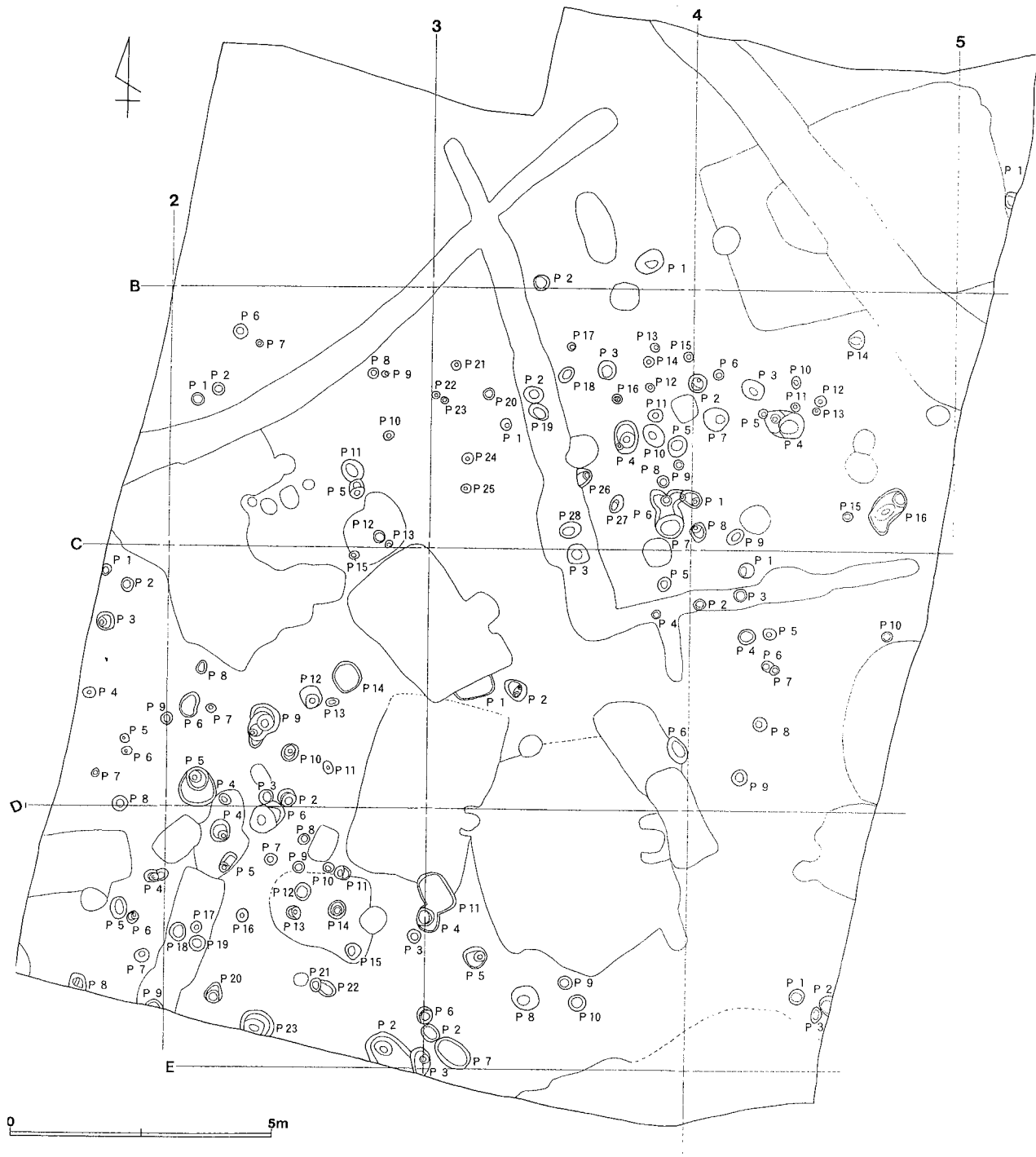
f ピット群

遺構に伴わないピットは全部で138基検出された。実測図及び深度は第21図に示した。ピットの分布は、調査区の南西部、北東部に特に密集している。この2箇所密集域は、2棟の掘立柱建物跡の位置とほぼ重なるため、掘立柱建物跡が営まれる際の痕跡である可能性がある。

g グリッド出土遺物

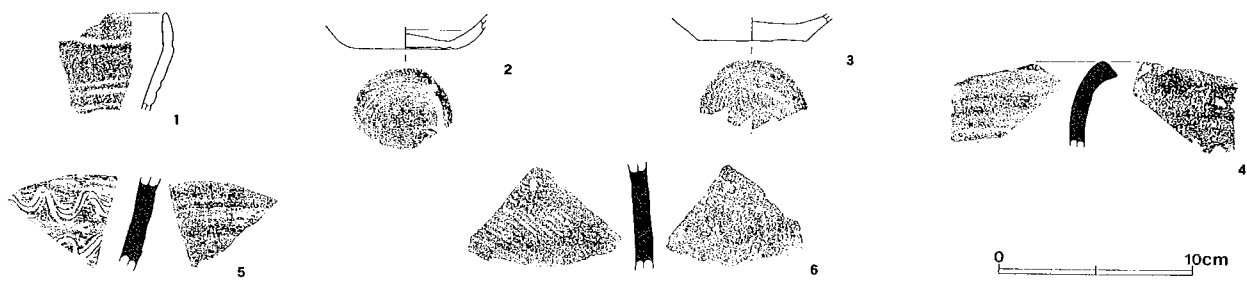
今回の調査では、表土からも比較的多くの遺物が出土した。これらについては第22図及び第10表で示した。

第22図1は、弥生前期末～中期初頭の鉢形土器と思われる。2、3は酸化焰焼成の須恵器の坏、4は還元焰焼成の須恵器の壺、5、6は還元焰焼成の須恵器の甕である。



ビット深度 (cm)									
A 3 P 1 33.0	B 3 P 1 16.5	B 3 P 15 31.0	B 4 P 1 22.5	B 4 P 15 12.5	C 2 P 5 20.5	C 3 P 4 14.5	D 1 P 5 15.5	D 2 P 11 13.5	D 3 P 3 45.0
P 2 24.0	P 2 26.5	P 16 11.0	P 2 17.0	P 16 19.0	P 6 7.5	P 5 9.0	P 6 7.0	P 12 34.5	P 4 21.0
A 5 P 1 26.5	P 3 19.5	P 17 17.0	P 3 21.5	C 1 P 1 9.5	P 7 5.0	P 6 20.0	P 7 16.5	P 13 12.0	P 5 12.0
B 2 P 1 16.0	P 4 8.5	P 18 15.5	P 4 39.5	P 2 9.5	P 8 6.5	C 4 P 1 12.5	P 8 9.0	P 14 8.5	P 6 33.0
P 2 17.0	P 5 48.0	P 19 13.5	P 5 6.5	P 3 23.5	P 9 28.5	P 2 11.0	P 9 5.0	P 15 21.5	P 7 6.5
P 5 9.5	P 6 6.0	P 20 8.5	P 6 19.0	P 4 17.0	P 10 12.5	P 3 8.0	D 2 P 2 24.5	P 16 12.5	P 8 27.0
P 6 8.0	P 7 7.0	P 21 8.0	P 7 9.5	P 5 10.5	P 11 9.5	P 4 7.5	P 3 14.0	P 17 8.0	P 9 7.0
P 7 3.5	P 8 8.0	P 22 18.0	P 8 14.0	P 6 23.5	P 12 12.5	P 5 9.0	P 4 12.5	P 18 19.0	P 10 6.0
P 8 10.0	P 9 4.5	P 23 9.0	P 9 11.5	P 7 4.5	P 13 8.5	P 6 16.5	P 5 5.0	P 19 16.5	P 11 13.0
P 9 21.0	P 10 22.5	P 24 9.0	P 10 7.0	P 8 17.5	P 14 6.5	P 7 7.5	P 6 34.5	P 20 14.0	D 4 P 1 10.0
P 10 15.0	P 11 17.0	P 25 6.5	P 11 4.5	P 9 8.5	P 15 13.0	P 8 11.0	P 7 10.5	P 21 6.5	P 2 8.5
P 11 8.5	P 12 9.0	P 26 17.5	P 12 12.0	C 2 P 2 20.5	C 3 P 1 3.5	P 9 8.5	P 8 16.0	P 22 12.5	P 3 12.0
P 12 7.0	P 13 35.0	P 27 40.5	P 13 11.5	P 3 20.0	P 2 19.5	P 10 11.5	P 9 16.5	P 23 31.5	
P 13 9.5	P 14 30.0	P 28 11.0	P 14 8.0	P 4 12.5	P 3 11.5	D 1 P 4 17.0	P 10 12.0	D 3 P 2 7.5	

第 21 図 ピット群実測図



第22図 グリッド出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	弥生土器	鉢	—	—	—	A、B、D、E	普通	赤褐	—	前期末～中期初頭と思われる。
2	HS	坏	—	—	5.4	B、C、D	普通	暗褐	30%	
3	HS	坏	—	—	(5.6)	B、D	普通	暗褐	15%	
4	S	壺	—	—	—	A	良	灰	—	
5	S	甕	—	—	—	A、E	良	灰	—	
6	S	甕	—	—	—	A	良	暗灰	—	

第10表 グリッド出土遺物観察表

旧	新
SK9	SX2
SD4	SK11
	SK12
D3P1	SJ2P3
C3P2	SJ2P7
SB1P4	SB1P1
SB1P7	SB1P3
SB1P5	SB1P4
SB1P8	SB1P5
SB1P3	SB1P7
SB1P1	SB1P9
D1P3	SB2P1
D1P2	SB2P2
D1P1	SB2P3
C2P1	SB2P4
D2P1	SB2P7

第11表 血沼西遺跡遺構新旧対照表

IV 堀南遺跡

1 遺跡の概要

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期（第1号住居跡）と、平安時代（第2号住居跡）の重複している2軒の住居跡である。

出土遺物は、住居跡の検出された古墳時代前期と平安時代のものが主体をなす。また縄文前期諸磯b式土器、及び中後期の浅鉢と思われる小破片が検出された。

2 遺構と遺物

a 住居跡

第1号住居跡（第24～25図、第12表）

調査区の北よりに位置し、平面形はほぼ方形を呈する。確認できた東西軸の規模は3.75 m、確認面からの

深さは0.19 mを測る。炉は検出されなかった。

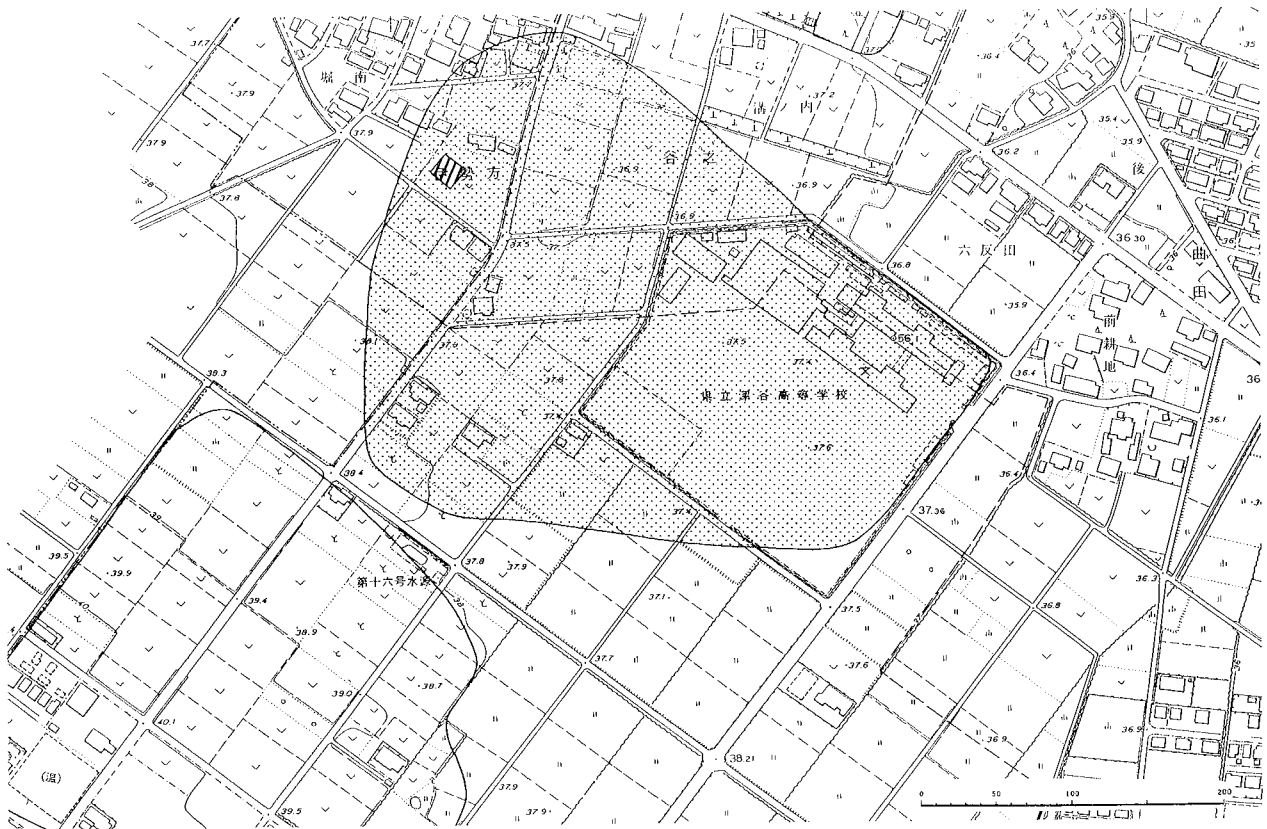
本住居跡に伴う可能性にあるピットは1基検出された。床面からの深さは0.4 mである。

遺物は埴、甕、高坏等が出土した。本住居跡は出土遺物から、4世紀代の所産と考えられる。

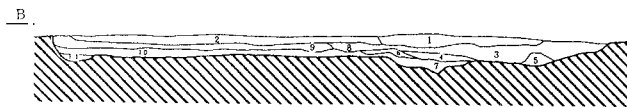
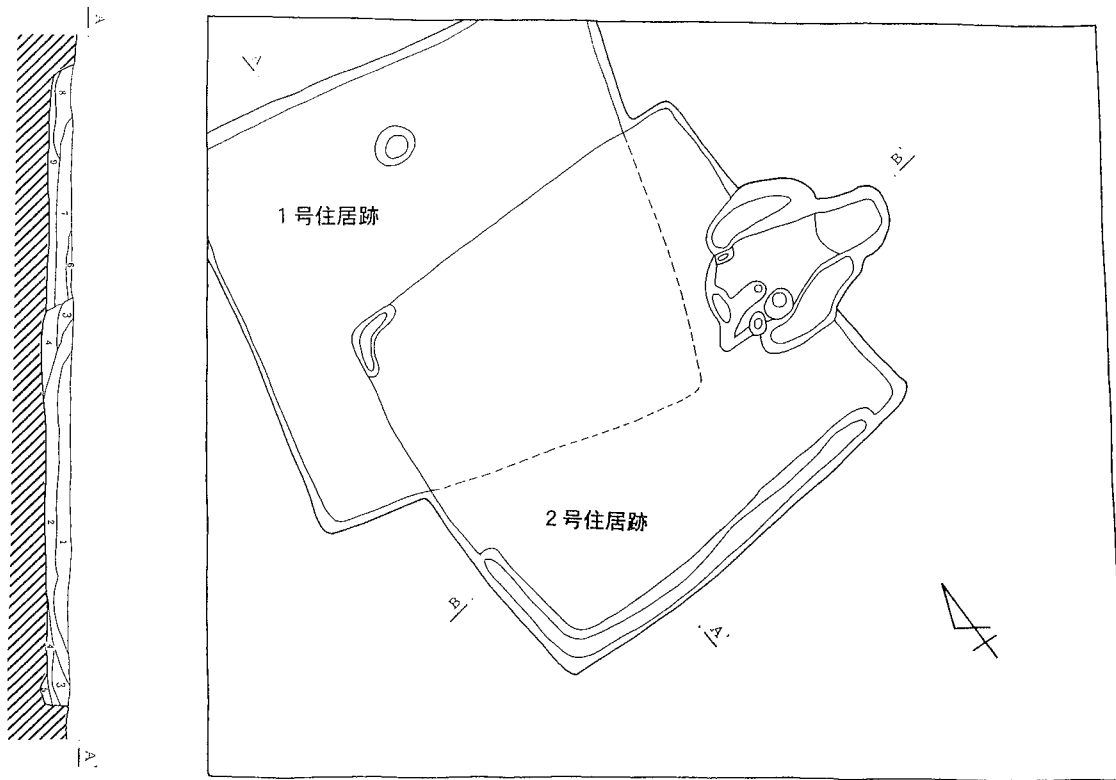
第2号住居跡（第24、26図、第13表）

調査区の中央に位置し、平面形はほぼ方形を呈する。規模は主軸3.75 m、主軸との直行軸3.5 m、確認面からの深さは0.18 mを測る。主軸の傾きはN-87°-Eである。カマドは東中央に位置し、袖は両袖地山削り出し構造である。壁溝は南西隅で検出され、北西隅でも部分的に検出された。

遺物は、須恵器細頸壺・坏、土師器坏・甕等が出土した。本住居跡は出土遺物から、9世紀前半の所産と考えられる。

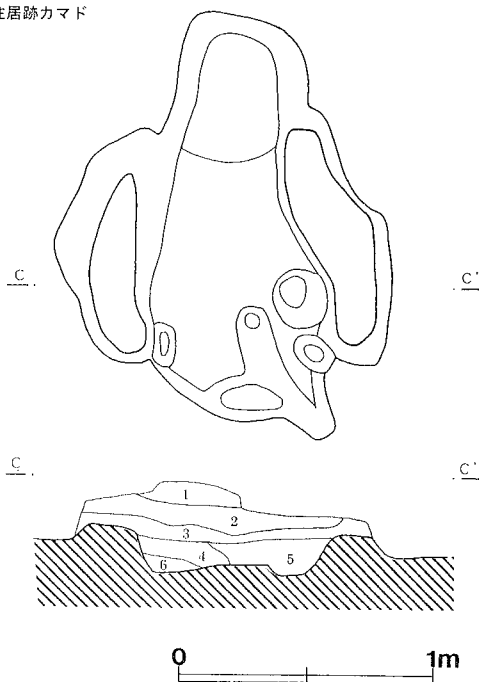


第23図 堀南遺跡の位置と発掘調査区



0 2m

2号住居跡カマド



A-A' 土層断面

- 1層 黒色土 焼土粒を含む。
- 2層 黒色土 ローム粒をマール状に含む。
- 3層 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 4層 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5層 黒褐色土
- 6層 黒色土 焼土粒を含む。
- 7層 黒色土 ローム粒をマール状に含む。
- 8層 灰褐色土 ローム粒を含む。
- 9層 黒褐色土 ローム粒を多く含む。

B-B' 土層断面

- 1層 暗灰褐色土 焼土粒を多く含む。
- 2層 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
- 3層 焼土層
- 4層 暗灰褐色土
- 5層 明褐色土
- 6層 黒褐色土
- 7層 明褐色土
- 8層 暗灰褐色土
- 9層 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 10層 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 11層 黒褐色土 ローム粒を含む。

2号住居跡カマド断面

- 1層 明灰褐色土
- 2層 明灰褐色土 焼土を多く含む。
- 3層 明灰褐色土 焼土・灰を多く含む。
- 4層 灰層
- 5層 灰褐色土 ローム粒を含む。
- 6層 灰褐色土 ローム・焼土粒を含む。

第24図 堀南遺跡遺構実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	H	埴	14.9	—	—	D、E	良	赤褐	20%	脚部との接合点なし。
2	H	埴	—	—	3.5	D、E	良	橙	70%	
3	H	高坏	—	—	(15.0)	E	良	橙	20%	
4	H	器台	—	—	20.7	E	良	赤褐	30%	
5	H	甕	—	—	—	C、E	普通	淡褐	35%	

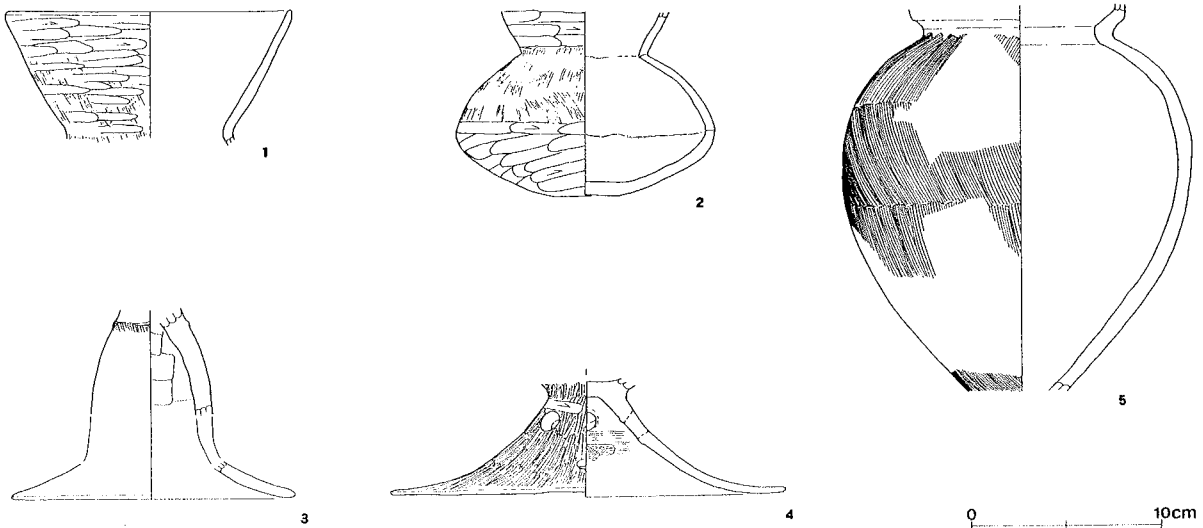
第12表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
1	H	坏	11.2	3.0	7.1	B、D、E	普通	暗褐	35%	内面に刷毛目。
2	H	坏	12.4	(4.0)	—	B、E	普通	暗褐	30%	
3	HS	坏	12.6	3.8	5.2	D、E	普通	淡褐	75%	
4	HS	坏	11.5	2.5	6.1	E	普通	淡灰	60%	
5	H	甕	20.6	23.4	3.8	C、D、E	普通	暗褐	50%	
6	H	甕	21.8	—	—	C、D、E	普通	暗褐	40%	
7	S	坏	—	—	8.0	E	良	明灰	40%	
8	S	坏	12.8	4.3	(6.1)	E	良	明灰	15%	
9	S	坏蓋	—	—	—	E	良	明灰	10%	
10	S	壺	5.1	13.8	7.4	E	良	明灰	90%	

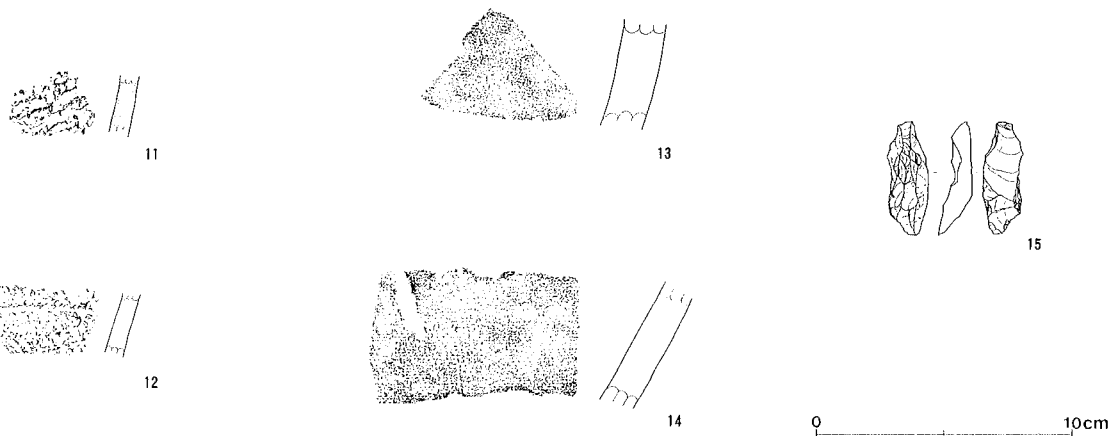
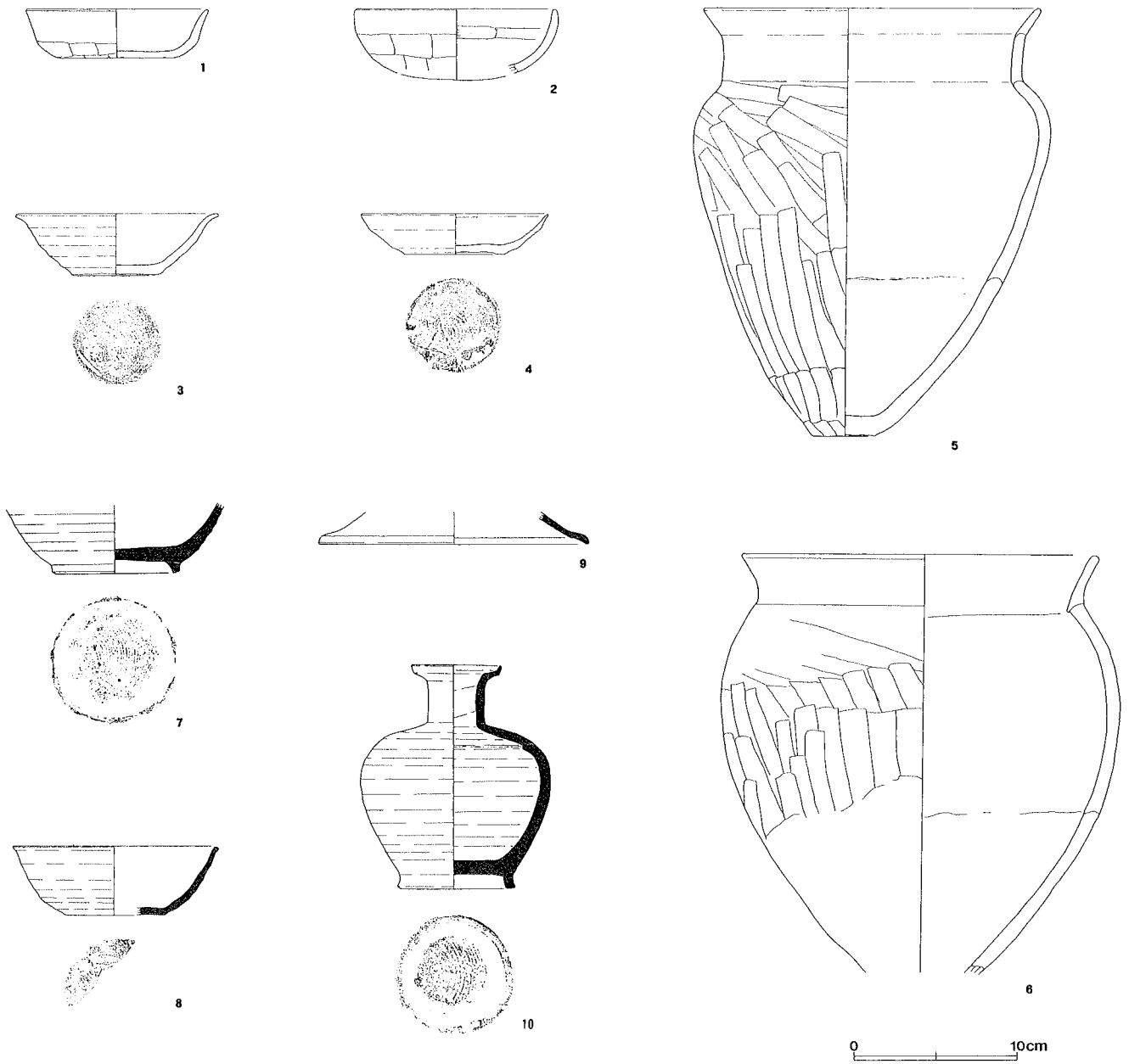
第13表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	注記、備考
11	縄文土器	深鉢	—	—	—	D、E	普通	淡褐	—	黒浜式。胎土に繊維を含む。 諸磯b式。
12	縄文土器	深鉢	—	—	—	C、D、E	普通	淡褐	—	
13	縄文土器	浅鉢	—	—	—	C、E	普通	淡灰	—	
14	縄文土器	浅鉢	—	—	—	A、E	普通	淡灰	—	
番号	種別	長さ	幅	厚さ	石材	重量	注記、備考			
15	剥片	4.5	1.6	1.4	黒耀石	6.84 g				

第14表 グリッド出土遺物観察表



第25図 第1号住居跡出土遺物



第 26 図 第 2 号住居跡及びグリッド出土遺物

V 結 語

1 皿沼西遺跡

今回の調査では、古墳時代中期の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡2棟、溝3条、土壙11基等が検出された。狭小な調査範囲にも関わらず、大変密度の濃い成果が得られた。特に、検出例の少ない古墳時代中期の住居跡（第4号住居跡）が検出できたことは大きな成果といえる。第4号住居跡の出土土器は、中村倉司氏の編年案（中村1999）のV期に比定されよう。この段階は、カマドが出現する直前期と考えられている。第1号竪穴状遺構も住居跡の可能性のあることを考えると、カマド出現直前の集落の広がりについて貴重な情報を提供したといえる。

平安時代の3軒の住居跡は、1箇所集中して検出された。中でも、第1号住居跡と第3号住居跡からは、遺物が比較的多く検出され、時期決定の拠り所となる。第1号住居跡から出土した3個体の甕は、口辺部のコの字部分が上部に押し上がり、胴部に最大径を有する。器形は砲弾状を呈する。第5図3、5は口縁の内面に凹線が施される。一方、第3号住居跡出土の甕は屈曲が弱く、コの字状の口縁部形態が崩れつつある。器壁は、第1号住居跡のものに比べ、厚みがある。また、酸化焰焼成の須恵器坏、高台坏が多く出土した。これらの特徴から、2軒には時期差があると考えられる。しかし、相互間に接合関係が認められることから、時期差はわずかであると思われる。第1号住居跡が9世紀後葉、第3号住居跡が9世紀後葉から10世紀前葉の所産と考えられよう。そして第2号住居跡は出土土器が少なかったものの、第3号住居跡との切り合い関係から、10世紀代の所産だと思われる。

また、古墳時代後期～9世紀前半の遺構、遺物は、今回の調査では検出されなかった。南に隣接する戸森前遺跡では、古墳時代後期まで集落が存続しており、両遺跡の関係について探求する必要があるだろう。そして

集落の存続期間について断定するには、より広範囲を調査する必要がある。しかし遺跡が、今回の調査区における状況と変わらず、一度集落地として放棄されたとするなら、9世紀後半になって再び集落が営まれる理由についても考える必要がある。水田等の生産遺構の検出も、これからの調査で期待される。今回の調査で得られた成果は大きなものであるが、今後に残された課題もまた大きなものである。

2 堀南遺跡

今回の調査では、古墳時代前期の住居跡1軒、平安時代初期の住居跡1軒が検出された。残念ながら2軒は重複していて、はじめに造られた古墳時代前期の住居跡は遺存状態も悪く部分的な調査に止まったが、埴やS字甕が出土する等、遺物の遺存状態は悪くなかった。

また、平安時代の住居跡も遺存状態が良かったとはいえないが、末野産と思われる小型細頸壺等が出土した。皿沼西遺跡同様に、狭い調査範囲にも関わらず、同遺跡の初めての調査として、遺跡の性格の把握には十分な成果が得られた。

3 おわりに

前章まで述べてきたように、本書で報告した2遺跡は、台地縁辺近くの妻沼低地自然堤防上に立地する。共に古墳時代前期～平安時代の遺物を主体とするものの、古墳時代後期～奈良時代の遺物は認められず、同様の遺跡の状況を示す。古墳時代後期～奈良時代に生産技術の発達や社会状況の変化があったことと、今回の遺構の分布状況が密接に関係している可能性も考えられる。

今回は共に、調査範囲が限られていたため、遺跡の実態についてあまり深く言及することはできない。しかし今後の調査で、集落の存続期間が明らかになり、

遺跡周辺における当時の社会状況についての言及が可能になることが期待される。周辺遺跡を含め、今後の妻沼低地域の調査の重要性を再認識した。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力

を頂いた森広高氏、望月勢津子氏をはじめ、皿沼西及び堀南遺跡の発掘作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表する。

〈参考文献〉

群馬県埋蔵文化財センター 1997 『最新情報展「出土した古代の土器」展示レポート』

田中広明、末木啓介 1997 「中堀遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集

中村倉司 1999 「岡部条里／戸森前」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集

写真图版

皿沼西遺跡



調査区全景



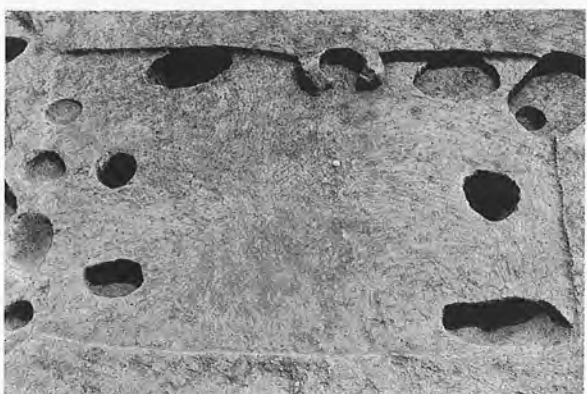
調査区北半



第1号住居跡



第1号住居跡貯蔵穴



第2号住居跡



第2号住居跡カマド



第3号住居跡

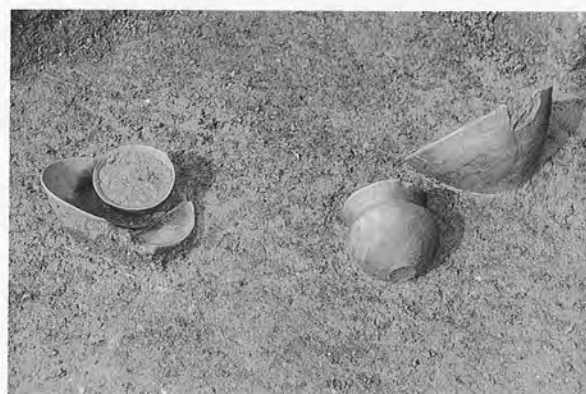


第3号住居跡カマド

皿沼西遺跡



第4号住居跡、第3号溝



第4号住居跡遺物出土状況



第1号竖穴状遺構遺物出土状況



第1号掘立柱建物跡



第1号住居跡3



第1号住居跡4



第1号住居跡5



第1号住居跡9

皿沼西遺跡



第2号住居跡3



第3号住居跡1



第3号住居跡3



第3号住居跡5



第3号住居跡6



第3号住居跡7



第3号住居跡9



第3号住居跡10

皿沼西遺跡



第4号住居跡1



第4号住居跡3(1)



第4号住居跡3(2)



第4号住居跡4



第4号住居跡5



第4号住居跡6



第1号竖穴状遺構1

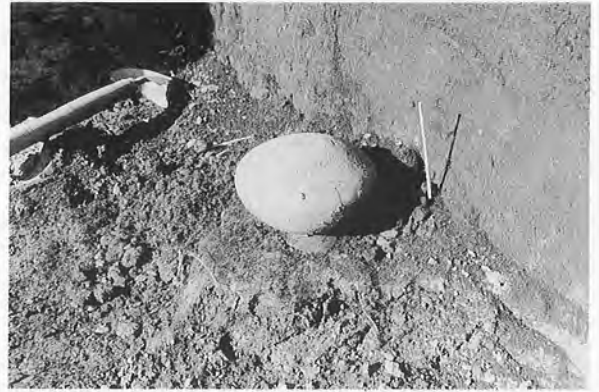


第1号竖穴状遺構4

堀南遺跡



調査区全景



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡カマド



第2号住居跡カマド土層断面



第2号住居跡カマド遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡 2



第1号住居跡 4

堀南遺跡



第1号住居跡5



第2号住居跡3



第2号住居跡4



第2号住居跡5



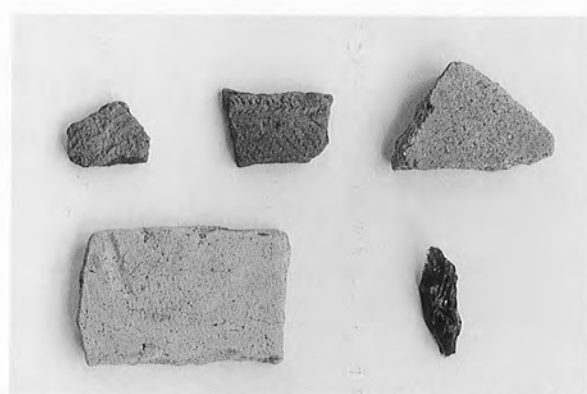
第2号住居跡6



第2号住居跡7



第2号住居跡10



縄文土器、石器

報告書抄録

ふりがな	さらぬまにし／ほりみなみ							
書名	皿沼西／堀南							
副書名	深谷市内遺跡 XI							
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	青木克尚、知久裕昭							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 048-572-9581							
発行年月日	2000(平成12)年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡					
さらぬまにしいせき 皿沼西遺跡	ふかやしおおざともりあざしんでん 深谷市大字戸森字新田 834-1	11218	143	36 12 19	139 17 17	19980819 ∩ 19980918	300m ²	個人 専用 住宅
ほりみなみいせき 堀南遺跡	ふかやしおおざいせかたあざほりみなみ 深谷市大字伊勢方字堀南 333-4、-5	11218	152	36 12 02	139 15 59	19990105 ∩ 19990114	20m ²	個人 専用 住宅
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
皿沼西遺跡	集落	古墳時代中期 平安時代	住居跡	4軒	土師器 須恵器			
			竪穴状遺構	2基				
			掘立柱建物跡	2棟				
			溝	3条				
			土壇	11基				
堀南遺跡	集落	古墳時代前期 平安時代	住居跡	2軒	土師器 須恵器			

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第62集

皿沼西 / 堀南

— 深谷市内遺跡XI —

印刷 平成12年3月27日

発行 平成12年3月30日

発行 深谷市教育委員会

印刷 ポプラ社印刷株式会社
